

第5章

事業の評価

団 長 報 告

参加青年代表報告

ディスカッション成果

事業評価アンケート

総 括 評 価

団長は「楽しい」けれど「悩ましい」

別府 充彦

今回、私が団長への就任要請を受けたのは、事前研修が始まった後の7月12日であり、団員との初顔合わせは、7月28日の事前研修最後のオンライン研修であった。本来の団長候補者が体調不良となったため、その急な代役であり、受動的に参加する形になったものの、内閣府在職中に青年国際交流事業に少し関わったこともあり、実際に体験できる有難い機会を頂戴したという気持ちであった。もっとも、青年交流事業の主人公は、言うまでもなく参加青年である。そして副団長や渉外の方も、団の一員として、団員を引っ張り、サポートする役割を担う主要な登場人物である。そこで悩んだのが、「団長の役割とは？」である。「団」である以上、団を代表(象徴?)する「団長」が、特に公式的な行事には不可欠であるし、相手側の団長に対応する者として必要であることも分かる。ただ、登場すべき舞台は事業の実施主体である両国政府組織(内閣府や中華全国青年連合会)と実施団体である青少年国際交流推進センターと中国国際青年交流センターにより用意されている。「団長」の仕事の意義を考えることから始まった。

1. 団長は遅れてきて乗っかる

事前研修には、最終日からの参加で、ネットによるものであった。既に団員の中での役割分担が決まっており、総務係を中心としつつ、団員たちは積極的に今後の進め方などを決めていく。自らの出遅れを意識するとともに、ネット対応力での世代間格差を痛感する一方で、団員の基本的な能力を信頼する契機となった。先ずは頼りになる副団長や渉外の方々の人柄を知りたいと、リアルでの顔合わせ(懇親会)の日程セットを行った。そこで、4人の方が全員揃うのが1月以上先の9月で、しかも全員が同時に揃うのは2時間のうち30分程度ということが判明し、働き盛りの方々との世代間格差も知ることとなった。この懇親会では、自分を知って貰おうという気持ちと一人で飲み過ぎた影響で、皆さんの話をあまり聞いていなかったという反省があるが、ラインの連絡網で、団員間でどのようなことが問題になっており、副団長等がそれにどう対応しているかをフォローする際も、一度お会いしていたことで理解が深まる面もあった。これで、団体運営という面では、副団長等に基本的小任せするというスタンスで良いと割り切れたと思う。事業開始以降は、社会人経験者である総務係の3人と副団長・渉外の4人で毎日の事業終了後の情報交換会が開かれることになった。偶々事業開始日にその現場に立ち会ったが、その日の夜に発生した体調不良者への対応もこのメ

ンバーが中心となり、大事に至らずに済んだ。この仕組みは団員である3人にはかなりの負担になった面もあると思うが、それだけ彼らの経験値を高める効果もあったし、その日のうちに、外からでは分かりにくい団員側の状況が把握できるという意味で、大変よく機能していたと思う。私も状況によって参加させて貰ったが、まさにこの仕組みの上に乗っかっていたと思う。ただし、今回のメンバーなのでうまく機能したとも思われるので、どのような団員構成でも、同じ機能が発揮できるかは断言できない。

また、遅れを取り戻すという意味で、出発前研修での最優先課題は、名前と顔さえも一致していない団員全員をよく知ることであった。結果的に、室長主催の壮行会で各テーブルを何度も回ったことで各団員の名前を確実に覚え、その特徴を知ることができた。この場で最初の挨拶をしたこともあり、自分が「団長」であるとの覚悟が定まる非常に良い機会となったと思う。その意味では、団長には早い段階で団員の写真入りプロフィールなどを渡して貰えば大変役立つと思う。

なお、団長としての個人的準備として、中国の少子高齢化に関する本を始め、最近の社会情勢に関する本、かつて在中国日本大使館に勤務した同期の友人に紹介して貰った政治体制に関する本、そして2年ほど前に買ったままの中国SF短編集(かなり面白い)などを読んでみたことも紹介しておく。具体的に役立ったとは言えないが、現在の中国に関心を持ち、今後も継続的に中国について知っていこうという個人的モチベーションにはなったと思う。また、バスでの移動時などで、中国側団長と会話する機会が多く、特に日本滞在時においては、東京の街並みや2LDKの中古住宅の最近の価格状況、その背景にある住宅政策、さらには日本政府の体制などについて尋ねられることもあった。偶々過去の仕事上の知識である程度答えられたものの、事前準備としては、中国側の情報よりも日本についての基本情報のようなものを頭に入れておくことが重要かもしれない。

2. 団長は「挨拶」が大事

11月7日(事前研修開始の1週間前)に、中国代表団歓迎会での私の挨拶案が過去の案文とともに相談される。ここで、団長の主要な仕事が挨拶を行うことであり、その内容については、過去の事例はあるものの、「団長の中国との関わりや事業への想いを盛り込む形が良い」と言われ、乗っかることなく、今回の団長として事業の意義を明確化

し、熱意を示す必要性を痛感する。そこで、中国で生まれた亡き母の記憶を遡るとともに、今回の事業の意義について改めて考えてみた。その結果、これまでの交流事業とは異なり、「日中両国の青年が一緒に、お互いの国を訪れて異なる文化や社会を体験する」とともに、「同時代を生きる同世代の隣人として、共通の課題の解決に向けて、意見を交換する」ものであると腑に落ち、自分が団長として参加する意義も挨拶や団長同士の会話などを通じて、事業の趣旨を共有することにあると意識できたと思う。

なお、挨拶というのは、「どのような場で」、「誰に向けて」、「何のために」発信するかが重要であり、繰り返し発信すべきメッセージと場面ごとの特性や関係者の違いを意識した表現が必要であるので、国の事業として入れるべき基本表現については、内閣府やセンターでの議論を踏まえて示された方が良いとも感じた。中国側の挨拶では、11月17日の日中首脳会談で「習主席と石破総理の会談で・・・両国の未来を担う若い世代を含む国民交流の拡大を後押ししていくことを確認した」との趣旨を、朱団長の最初の挨拶から始まり張家口の地方政府関係者も含め、ほぼ常に挨拶に盛り込んでいた。最近の首脳レベルでの会談を引用して、日中青年交流に対する積極的な姿勢を示すものである、こちらの挨拶の中でもこのフレーズを使った方が良くいかもしれないと思う面もあった。確かに、トランプ米大統領の再登場を控え、中国側が日中関係の改善に強い意欲を示していることを示していることは伝わり、団長としては好環境の下で事業が行われることは有難いと思ったものの、中国側団長が直轄事業を推進する立場でもあるのは異なり、国からは後押しされる側の(民間の)団長という

立場も考慮し、従来の表現で事業の重要性を述べるに留めることとした。団長を担う者には、早めに挨拶の重要性を伝えとともに、日本政府としての本事業に対する姿勢としてどのような表現が一番ふさわしいかといった点なども含め、どこまで団長の判断に表現を任せるかを明確にしておくことが望ましいと考える。

3. 中国は変化する

10年振りの中国で感じたことも書いておきたい。一つは都市や建物の変化である。前は、至るところが工事中で空気もとても悪く、高度成長期の日本のような雰囲気であったが、今回は、街には斬新な建築物も多く整備され、一方では胡同の一部をうまく残したまま周囲を整備するなど、日本の2000年代のような雰囲気も感じた。特に面白かったのは、第一に泰安里文化芸術センターである。北京到着日に朱団長に案内して頂いた場所であるが、そもそも建物のある通りが、ここだけ上海風になっている(写真参照)。そして、センターの中では、2024年に紫禁城も含めて「北京中軸線：中華の理想的秩序を示す建造物群」として世界文化遺産として登録されたことを踏まえた展示をしつつ、1920年代風の映画ポスターやコカ・コーラの自動販売機などが置いてあり、カフェも併設しているのだ。未だ一般公開はしていないということであったが、ノスタルジックであるが新しさもあり、これから若者が集まる街となりそうな趣であった。また、中国国際青年交流センターから徒歩10分以内のところにできていた巨大なショッピングモールは日本よりもお洒落な感じもあったし、河北の張家口で泊まったホテルもニューオータニとよりもシックな豪華さを感じ



泰安里建筑文化艺术中心のある通り (左側の看板はセンターのもの)

じさせた。

もう一つは、空港やホテル、レストラン、バスなどで出会った中国人従業員の態度の変化である。かつては見られなかったサービス精神というものが感じられた。私の仮説であるが、中国にも政治的な身分とは関係ない富裕層が生まれ、金額に見合うサービスを求めており、それに対応できる人間が生まれているという気がした。これは、中国でも資本主義的な論理が機能する環境になったということかもしれないが、これから経済的に厳しくなると、欧米や日韓のような貧富の2極化が進行していく過程に入っていく予兆のようにも感じられた。

4. 青年は成長する

団長として一番楽しかったのは、日中の青年達が様々な日程を重ねるたびに、各人がより積極的に行動し、一緒に成長していく姿を見ることだった。事業最終日に、報告会準備の役割分担を決める時、各団員が自分に相応しいと思う役割に直ちに立候補し、あっという間に決まった。そして、すぐに役割に応じて集まり議論が始まった。最初に出会ったときにも、その積極性に感心したものだが、総務係などのリーダーに任せるところも感じられた。今回は全員がリーダーシップを取って進めている感じで、本当に成長したのだと感じた。団員の報告書を読むと、改めて、最初に両国の青年が会った頃のぎこちなさや、筑波での日本団員の見送り、北京での中国団員の出迎え、そして最後の大合唱の光景が蘇る。各団員が自らの成長を感じ、中国青年との強固な個人同士の関係を続けようと誓い、将来もこの経験を活かしたいと思っていることが伝わる。団長としては、

団員を誇らしく思い、今回の事業は成功したと実感する。

事業に対する個人的な感想を少し補足すると、川島先生の基調講演は、日中青年に両国の認識のずれを理解させ、自ら情報を把握、理解しようとする姿勢を持たせるという意味で、事業冒頭に行うものとして大変良く、また私自身も学びのある良いものだったと思った。また、中国で金杉大使自らが丁寧に話ししてくれたのも、大変貴重な体験だったと思う。政府の事業として、引き続きこのようなレベルの経験が提供できることが望ましいと思う。

今回参加した日中の青年達は、もともと好奇心や社交性が高く、互いの国に関心のあるものが多いという面もあったと思うが、経済的にも文化的な面でも日中の格差のようなものは感じられなかった。おそらく韓国も含めた日中韓の恵まれた若者たちは、西洋の若者たちのように、同等レベルの経済力の下で育ち、共有する文化も持っており、いずれも少子高齢化が進む社会に対応していくことになる。これから30年後、参加青年の子どもの世代には、ヨーロッパの青年たちが、異なる文化を尊重しつつ、一緒に同じ課題に取り組んでいくような関係になれるのではないかと、日本とアジアの将来への希望を感じたことも記しておきたい。

最後に、内閣府やセンターとの情報連携拠点となってくれた勝間田副団長、団員との関係全般を管理し、的確な判断をして頂いた伊藤副団長、団長秘書のように個人的サポートまでしていただいた三宅さん、様々な場面で幅広くサポートして頂いた椎原さんに、改めて感謝したい。



在中国日本国大使館で金杉大使と記念撮影をする筆者

参加青年代表報告

2024年度日本・中国青年親善交流事業

中国の友人たちが教えてくれた、日本の強みと魅力

石塚 諒平

はじめに～本事業の参加経緯と目的意識～

私と中国との出会いは遡ると10年も前になる。当時大学3年生だった私は交換留学で約1年カナダに住んでいた。それまで海外旅行に行ったことすらなかったのに、本場の英語を学んでみたいという単純な想いと勢いだけで留学を決意したのだが、想定外にも現地で中国人の親友が多くでき、彼らの温かさに感銘を受けたことが最初のきっかけだ。このきっかけを逃すまいと、留学を終え日本に戻ってから日中友好に取り組む民間団体に所属し、両国友好をテーマに交流を継続してきた。

これまで私は複数回訪中をしたことがあるが、どれも民間団体を通じた草の根交流であり、日本代表として意見を述べるような責任が求められる機会は少なかった。両国の友好を語るうえで国や外交の視点は欠かすことができない一方で、経験したくてもその障壁は桁違いに高く、一個人には限界もあったため本事業は千載一遇のチャンスであった。

加えて、普段私は企業のグローバル人材育成を支援する研修事業者で勤務しており、仕事上で「グローバルリーダー育成」について考える場面が多くある。そのため、本事業での国の代表としての交流経験は、日頃の業務と今後の人生の両軸でかけがえのない貴重な経験になると考え応募した。

東京フォーラム中国青年代表団歓迎会での集合写真。互いにまだ緊張している

本事業での学び

コロナ禍を乗り越え、5年ぶりに対面での交流が復活した今年度からは事業の形式にも様々なアップデートがなされ、日中代表ユースフォーラムの全10日間（東京フォーラム/北京フォーラム5日ずつ）の日程を両国青年が共に過ごし、より濃密に交流する機会を得ることができた。大小さまざまな学びを数多く得たが、本レポートでは特に中国青年と比較することで改めて認識できた「日本の魅力」や「日本人の強み」に焦点を当てる。

日々暗いニュースや日本悲観論が繰り返し報道され続ける中で、正直なところ長らく「日本人らしさ」や「世界の中での日本の在り方」に確信を持ち切れずにいたが、中国青年たちとの深い関わりを通じて見つめなおすことができ

た。

～外国人を魅了する日本のコンテンツ～

最も印象的だったのは、21日夜に日本青年がホストになって開催した「東京散策」中に見られた中国青年たちの態度の変化である。

19日に初めて中国青年と対面し、20日のディスカッション迄の間少し交流をしたときに感じた彼らの印象ははっきり言って良くなかった。「ディスカッション中も口数が少なく、プログラムに受け身で、感情の読めない人たち」という印象を持ち、関わるのはなかなか骨が折れそうだし、果たしてプログラムが成立するのだろうかと思えた。

潮目が変わったのは東京駅周辺を二手に分かれて周辺散策した時からだ。一方は期間限定のマリオのクリスマスイルミネーションで、もう一方は東京駅内の「ちいかわらんど」で時間を過ごした。また、中国青年の中に1名瀋陽出身の方が偶然おり、丸の内側からの東京駅駅舎を見て「故郷の瀋陽駅とそっくりだ!」と興奮交じりに喜び、写真を撮っていた姿も印象的だ。調べたところでは、東京駅を設計した辰野金吾氏の下で学んだ2名の学生により瀋陽駅の駅舎は設計されており、両駅の外観はよく似ている。

散策中の会話を楽しみ、一緒に写真を撮っているうちに、互いの距離感を一気に縮めることができた。この経験から日本の景観やコンテンツなど日本人にとってはある種日常の一部になってしまったものにも、外国人を惹きつける魅力があることに気付けた。日本のアニメやキャラクターコンテンツが中国でも人気なことは当然知っていたが、SNS映えするような写真を数枚撮って終わるかなと思っていただけ、予想を超える反応だった。長いようで短い10日間という限られた時間の中で、中国青年と固い友情を築くことができたのは日本のコンテンツ力のバックアップも受けながら関係構築ができたおかげではないだろうか。



東京フォーラム中国青年代表団歓迎会での集合写真。
互いにまだ緊張している

近年の中国の発展ぶりは凄まじく、急激な経済発展の中で生まれ育った「00后」の世代は「物質的に満たされており、大抵の体験では感情を動かすことができないのではないか」と私自身弱気になっていたところがあった。しかし今回中国青年たちが日本滞在中の様々なシーンで、心底喜んでくれる姿を目の当たりにしたことで、私自身も日本の魅力とはなにか?を再認識する機会となった。

～日本人の強み～

また、東京フォーラムでは両国にとっての共通課題(少子高齢化や気候変動、地方創生)をテーマにディスカッションをし、両国関係の将来に向けてできることをまとめて提言する時間が設けられていたが、そのディスカッションを通じて両国の違いがいくつか見えたことも、非常に印象的であった。

結論から述べると「中国と日本の当たり前は結構真逆」だということである。自明と思われるかもしれないが、異文化を理解するうえでは「漠然と違う」と認識するだけでなく、どの点が、どのように異なるのかを「具体的に理解」する必要がある。今回感じた特徴としては中国には【少数のトップによる決定が尊重される／多産のためにはスピードを重視／問題が生じたら道を変えればいい】という考え方が根付いている。一方で日本は【皆に合意された決定が尊重される／小死のためには質や正確性を重視／道を間違えないように上手くやる】という考え方をしており、この点において日中は非常に対照的な価値観を持っているといえる。

実際にプログラム中のディスカッションでは、中国青年は準備効率をよくするためにメンバー各自がテーマについて調べ、繋ぎ合わせて発表をしていた。ややもするとパッチワークになってしまいかねないが、発表時に適宜口頭補足も加えることで論理構成をシームレスにし、発表内容の質を高めていた。一方で日本青年は事前準備で時間を掛け、省庁のホームページを念入りに調べて、国の見解を整理し、その上で原稿や想定Q&Aを作って、リハーサルを何度も行ってから本番に臨んでいた。

重要なのはどちらのやり方がより優れているということではなく、日本と中国は異なる箇所に強みを持っており、得意とする領域がそれぞれにあるということだと私は捉えた。中国の強みである「最新技術をトップダウンで社会実装」した例が、まさに本事業で訪問した張家口市の太陽

光・風力発電施設であった。中国の圧倒的スケール感をこの身で体感することができたのは貴重な経験だったと感じる。

一方で日本の強みについて考えたとき、世界的ビジネススクール・IMD北東アジア代表の高津尚志氏の「複雑性を調整しきる力こそ日本の強み」という言葉を思い出した。例えば渋谷駅は地上3階、地下5階の計8階建てであり、上下の移動幅が大きいだけでなく、迂回路も多く、平面上でも構造が複雑になっている。さらに渋谷駅には鉄道4社・9路線が乗り入れているが、電車が2分遅延するだけで謝罪する厳格さでルールを運用している。このようにして複雑なシステムを組みあげるだけでなく、運用しきってしまう点が日本の強さであり、それは本事業の最中にも垣間見えていたと個人的には感じている。我々はこれからの自国の行く末に対して過度に悲観的になるのではなく、「日本らしさ」や「日本の独自性」を活かして、輝ける土俵を見極めていくタイミングに差し掛かっているのではないか。

結び

本事業に参加する中で体験したこと、得た学び、そして出会いには残念ながら鮮度がある。どれだけ鮮烈な体験であっても、それは種でしかなく、新たな体験や学びのような肥料／水を与え続けなければ、花は咲かずいつかは枯れてしまう。そういう意味では、経験そのものよりも、その後どういった活動をするかの方が重要な意味を持つといえる。

幸いなことに私は現職では「企業のグローバル人材育成」を支援する仕事をしているため、今回得た学びを様々な文脈に載せて他者に伝える機会がある。また、民間団体にも所属しており、活動機会は十分あるため、今後は活動のステージを1つも2つも上げ、これから日中友好を志す人を育て、受け入れる側に回っていききたいとの決意が本事業を通じてより強まった。

最初に私が日中友好を志したときから約10年が経過したとはいえ、まだまだ駆け出しの身である。日本と中国をつなぐ友好のバトンを未来に繋いでいくためにも、引き続き精力的活動を続けていくつもりである。最後に、本事業に際して関わってくださった全ての方々に心より感謝申し上げたい。



イルミネーションの前でポーズをとる中国青年達



北京フォーラムでのグループディスカッションの様子

さようならは言わない。ともに新たな道へ。

大前 若菜

この経験は私のこれからの人生において必然であったと感じる。10日間中国青年とともに研修を行ったことで、こんなにも仲を深めることができたことに感動を覚えている。私たち第42回中国派遣団は「バトン、夢を紡ぐ。未来へ繋ぐ。」という団目標を定め、本事業に臨んだ。このバトンを多くの人に渡すべく、この事業報告書には①本事業に参加したきっかけ②本事業において印象に残ったこと・学び③事業を通した私の変化④本事業を終えて・これから、の4点を以下に記述する。

1. 本事業に参加したきっかけ

私が今回の事業に参加しようと思った大きな理由の一つは中国の地方創生の実態に興味があったからだ。大学の第二外国語の授業で中国語を履修していたこともあり、中国には興味があった。その中で最も興味を引いたのは、中国が抱える都市と農村の格差についての話であった。地方出身でもともと地域活性に興味があった私は、日本と中国の地方創生の事例を比較し参考にできる部分や互いに助け合える部分があるのではないかと考えていた。本プログラムは、少子高齢化、気候変動、地方創生の分野について中国青年とディスカッションをしながら学びを深めることができるとの記載があった。本事業に参加することで、日本と中国の実情を実際に自分の目で見て、感じ、考えたいと思った。

2. 本事業において印象に残った出来事・学び

東京フォーラムでのディスカッションでは、「地方」に対する日中の捉え方の違いに驚いた。日本では「地方」といえば三大都市圏以外の人口やものが集中していない地域を指すが、中国では行政区画や地域そのものを指していた。

議論を行う最初にこのような違いに気づいた。この違いを背景に議論を進め、丁寧にすり合わせの作業を行うことでその後のディスカッションはスムーズに進んだ。お互いの前提知識、前提状況を確認する相互理解の重要性を再認識した。また、地方における少子高齢化に付随した地方から都市への人口流出、交通サービスの縮小、介護問題など、日本と中国が共通して抱える課題についても意見を交わした。同じ問題に対するアプローチは異なるが、そこにこそ互いに学べる部分があると感じた。印象に残ったのは技能実習生の話である。日本では、海外からの労働者流入も少子高齢化による人口不足の改善の方策にしようと考えている一方、中国はすでに圧倒的な人口規模を誇っているため、海外からの移住者ではなく中国国内での若者の移動を重視し政策を展開している話が、人口構造や労働市場の状況の違いを表しており面白く感じた。

北京フォーラムでは張家口市の太陽光・風力発電所を訪れた。広大な土地に広がる発電施設を目の当たりにし、中国の規模感に圧倒された。これまで私は、中国のエネルギー政策といえば石炭火力発電が中心であり環境問題への対応は遅れているという印象を持っていた。しかし、厳しい冬の気候の中でも再生可能エネルギーを積極的に活用し地域の発展につなげていることを施設の方の説明で理解し、その印象が大きく変わった。これらの設備で町の電力、また都市の電力にも貢献している話を聞き、驚いた。

そして最終日前日の夜、忘れられない出来事があった。ある中国青年が別れを惜しんでステージ上で中国の歌を歌い始めると、次々に他の中国青年も加わり、やがて私たち日本青年もステージに上がり参加した。会場全体が歌と踊りの一体感に包まれた。日本の歌、中国の歌を肩を組んで歌い合う中で、心が通じ合う瞬間を実感した。お互いの



張家口市で視察した太陽光発電所

国の歌を知らない部分もあったが、それは私たちにとって些細な出来事であった。お互いの文化・人を認め合っている世界であった。これまでのすべてのプログラムを通じて築いた友情が確かに形となり、この瞬間の感動は生涯忘れることはないだろう。

3. 本事業を通じた私の変化

プログラムを通じて感じたのは、言語の壁は心を通わせる上で本当の障壁にはならないということだ。初めは言語を使いこなせないことに不安を抱いていたが、間違えてもいいから積極的に話してみる姿勢が大切だと気づいた。ジェスチャーや翻訳機で案外伝わることもわかり、会話も30分以上バスの中で続けられたことで自信がついた。またこれまで以上にその国の言語でコミュニケーションを取ってみたいという気持ちが強くなった。

さらに少子高齢化や気候変動といった問題については、国同士の協力が欠かせないと痛感した。一国だけでなく、さまざまな視点から課題に取り組むことで、新たな解決策を見出す可能性があると考えられるようになった。ディスカッションの準備期間での専門家による講義の中で日本における社会問題に対するアプローチも学ぶことができた。中国における取組を学べる以上に、日本における政策を深く理解する経験ができたことが何より勉強になった。ニュースなどのメディアだけではなく、さらに一歩踏み込んだ学習をしたうえで自分の考えを明らかにする重要性を実感した。

また、今回のプログラムでは多くの素晴らしい人々と出会えた。日本青年団の中には、自分なりのリーダーシップを発揮している仲間が多く、その姿勢に多くを学んだ。その中で、どうすれば自分がチームに貢献できるかを考え、積極的に挑戦する姿勢を持てた。普段は人の目を気にしてしまう自分だったが、このプログラムでは最初に発言することを心がけ、それを支えてくれる仲間のおかげで自信を持つことができた。中国青年の中には今回のプログラムで日本の文化や日本語に興味をもってくれた人もいた。彼らの

エネルギーは私がこれから中国語を学びたいと挑戦する気持ちに火をつけてくれた。事業を通して特に私の主体性とチャレンジ精神が高まったように感じる。

4. 本事業を終えて、これから

北京から東京へ帰る飛行機の中で、中国青年から「不说再见 开始阶段」(さようならは言わない。ここから新しい道を歩み始めよう※意訳)というメッセージが届いた。この言葉に表されているように、今回築いた友情と学びはこれからも続くものだと感じている。彼女は日本語を話すことはできなかったが、事業期間中、中国語、英語、翻訳機、ジェスチャーを使って幾度となくコミュニケーションを図ってきた。彼女とも、他の中国参加青年とも今後も連絡を取り合いながら、日中の架け橋となれる存在を目指したい。またこの輪を広げていくためにも、この経験を伝え日本にはびこっている誤った中国の認識を是正する手助けができればと思う。

今回、中国へのイメージが良い意味で大きく変わった。現地に行き、直接人・文化に触れる経験が視野を広げ、異文化理解を深める最良の方法だと実感した。だからこそ中国だけでなくさまざまな国を訪れ、その土地の価値観や歴史、文化に触れたいという思いが強まった。また、日本の歴史や政治についても知識を深めつつ、興味のある社会問題についてさらに学びを深めていきたい。今度また中国青年や他の国の青年と出会ったとき、正しく日本の文化、歴史、経済、政治について紹介できるようにすることが私の目標である。また、本事業に参加するきっかけであった地方創生について、専門家や中国青年とのディスカッションを通して問題が明確化されたと感じる。このような問題の解決に将来取り組んでいきたいと思っているので、継続して学び続けていきたいと思う。今回本当に貴重な経験をさせていただいた。この経験談を話すことを通して日中友好のバトンをつなげるべく行動していきたい。



中国訪問時に撮ったグループ写真

差異を尊重するということ

渡邊 香峰

1. はじめに

第42回日本青年中国派遣団は「バトン〜夢を紡ぐ、未来へ繋ぐ〜」というスローガンを掲げ出発した。今回、日中青年とともに学び合った10日間は、今後の日中関係の発展へ限りない可能性を見出すことができたと同時に、真の日中友好とは何かを模索する機会となった。また、お互いに日本と中国の絆を強固なものにしていこうとする同志と、友情を深めることができた経験は、私の人生にとってかけがえのない財産であると確信している。そして、何よりも日本青年の代表として参加できたことは、日本を代表する責任感と使命感を持ち、交流を行うことができる貴重な機会であった。

私が生まれ育った大分市は中国の武漢市と姉妹都市であり、中学時代、留学生としてやってきた中国人と友達になったことをきっかけに、隣国である中国に興味を持つようになった。大学では国際法や人間の安全保障論に関する学び、台湾への長期留学、日中学生会議での経験を通じ、将来は国と国の友好に貢献できる人間になりたいとの想いをもっていた。内閣府主催の本青年交流事業は、大使館や省庁の訪問を通じ、国家の最前線で活躍する方々から直接お話を伺えるというスケールの大きさが、参加への挑戦を後押ししたのは事実だが、国と国の外交といえども、その本質は人と人との信頼関係の構築にあると考え、同世代の人々との交流を通じて地に足のついた関係性を築きたく、参加を決意した。

2. 成長の原点となった3つの経験

11月19日から11月28日に行われた日中代表ユースフォーラムにおいて、特に印象に残ったことが3つある。

1つ目は、東京フォーラムでのディスカッションである。気候変動・環境というテーマの下、経済との両立とのサブテーマを掲げ、各自リサーチを進めて臨んだ。当日は日本青年3人、中国青年3人のグループで議論を行った。日本青年からはごみの分別を徹底することで経済効果を生み出す地方自治体の紹介、デコ活の身近な取り組みとしてクールビズ・ウォームビズとグリーンカーテンの紹介、さらに国内における電気自動車の普及と、国と自治体の政策についてプレゼンテーションを行った。それに対し中国側からは、異常気象時における電力不足に対応するエネルギー経済システム、カーボンニュートラルと経済のwin-winな関係性について説明があった。特にエネルギー転換と経済の面で、日中共に電気自動車などの新エネルギーに関するトピックへの関心が高いことから、青年間で有意義な意見交換ができたように思う。中国でEVが広く普及する理由を質問した際、中国は政策として補助金や免税を行っており、経済的効果が多く見込まれ、さらに公共の交通手段の電動化を推し進めているのも普及率に大きく影響しているだろう、との見解を伺えた。また、日本のEV普及が伸び悩む原因について、日本は従来の技術力が高いためガ

ソリン車やハイブリッド車の方が好まれるのではないかと、どの日本に対する印象も伺えた。このディスカッションを通じて、水素エネルギーや再生可能エネルギーが強い日本、発電効率を高める技術が高く、新エネルギーを大規模に運用できる中国のお互いの強みを活かしてエネルギー協力関係を構築していくことが可能なのではないかと、青年同士で合致することができた。

2つ目は、北京フォーラムでの中日青年対話会において、中国人民大学人口開発研究センター人口健康学院の教授である宋健氏から少子高齢化に関する講義を受けたことである。中国式現代化とは人口規模の大きい現代化であり、中国の少子化の要因として、出産適齢期の女性人口の減少や結婚・出産が延期され出生率が低下していることについて学んだ。2050年には一人の若者が一人の老人を養うことになるという扶養問題が懸念されており、これがどのように中国社会に影響を与えるのか、についても議論された。また、出生のポテンシャルを高めるための経済的支援や退職年齢の引き上げによって労働力人口を維持し、社会全体で「高齢者」と見なされる年齢区分を引き上げることで、高齢化の進行を緩やかにすることを目指すなどの政策がとられていることを知った。その後、青年同士の意見交換の時間では、日中共通の課題である少子高齢化について、政策の比較や若者の結婚・出産への認識、さらには今後の展望を共有できた点は自分自身の問題意識を深める機会であった。

3つ目は、北京到着初日の北京散策である。日本青年5名と中国青年6名で史家胡同博物館を訪れた。昔ながらの生活の様子や子どもの遊びを感じられる展示があり、歴史と文化に触れることができた。さらに有名な小説家である冰心に関する展示もあり、中国文学へ関心をもつきっかけとなった。胡同の街並みを歩くと、家の玄関先で持ち寄った椅子に腰かけ麻雀を楽しむ大人や、街灯の下で楽しそうに話をする子どもたちの姿から、人情味のある風景にどこか懐かしさを感じる瞬間があった。この日は、中国青年たちが地下鉄のチケットを事前に用意してくれたり、行きたい場所を案内してくれたり、心のこもったおもてなしを受けた。その温かい気遣いに触れるなかで、日本青年と中国青年の友情が一層深まっていったように思う。



東京フォーラム時のディスカッションの様子

3. 学びと成果

本プログラムを通じて学んだことは、「異なる価値観を受け入れて尊重することの難しさ」と「自分の頭で考え、言葉にして伝えることの大切さ」の2点に集約される。今までの自分自身を振り返ると、いつも自分の殻に閉じこもり、コンフォートゾーンに居座る人間であった。本事業では、大学というコミュニティから一步踏み出し、普通なら出会うことができない様々なバックグラウンドをもつ仲間と出会うことができた経験は、一生の財産になったと確信する。事前研修では団目標や役割分担等の話し合いをする際に、全員が自分の意見を主張する姿、会話の中で、Yes, andの手法を実践し、自分と異なる意見があったとしても、真っ向に反対するのではなく、まずは受容し寛容にコミュニケーションをする姿に多くの刺激と学びを得た。話し合いの場で意見を言わない、主張をしないことはその場において存在価値がないのと同じであり、だからこそ等身大の自分で振る舞い、積極的にコミュニケーションを取り、主体的な自分であろうと心がけを行い実践できたことは、参加前の自分に比べて成長できた点である。

今回、私は日本文化紹介係として、ユースフォーラム中のパフォーマンス全般の準備と企画を担った。東京フォーラムの歓迎会と北京フォーラムでの歓送会では、折り紙体験や有名な歌の歌唱とオタ芸を披露した。事前に、全員で折り紙の練習をしたり、対面でダンスの練習会を企画したりと、当日は全員が力を合わせて最高のパフォーマンスを届けることができたと同時に、初対面のタイミングであった日中青年にとって、その後のコミュニケーションで、お互いの緊張が和らぐきっかけになったと思う。

続いて、茨城県滞在期間中の歓迎会では、「恋ダンス」の披露や「世界に一つだけの花」の歌唱に取り組んだ。短い準備期間にも関わらず、全員が力を合わせてやり切ったことで、当日は中国青年や茨城青年を含む多くの方々と一体となり、盛り上がる事ができた。この瞬間は非常に充実感を覚える忘れられないひとときである。

振り返ると、浴衣ファッションショーや日中両青年での書道の披露など、全てを大成功で終えられたのは、「挑戦したい」と積極的に意思表示をし、事前練習から本番まで団員全員が協力的で、支えてくれたおかげであり、感謝の念に堪えない。

今回、全員がディスカッション、カメラ・記録、総務、日本文化紹介係のいずれかの役割を担い、それを遂行する中で、事前研修後から本フォーラムに至る約4~5か月間、適度な責任感と使命感を持つことができたのではないだろう

うか。6月の事前研修後から本フォーラムまでの5か月間の空白期間中には、月に2~3回「作業会」と題した1時間程度のオンラインミーティングを開催し、近況報告や係別の進捗状況、中国語学習の共有などを定期的に行った。また、「ガチ中華会」として対面で中華料理を楽しむ機会を設け、団員同士の親睦を深めた。これらの活動が各メンバーのモチベーション維持に大きく貢献したとを感じる。このように、全員があらゆる場面でリーダーシップを発揮できたことは、結束力のある団作りに直結したと考える。日本文化紹介係として、そして42団の一員として活動できたことは、リーダーシップの面で自分の自信に繋がったと実感する。

4. 今後の展望：伝える使命を自覚して

北京で在中国日本大使館を表敬した際、金杉大使の「日本人は慎重すぎて、石橋を叩いて渡らない」という言葉が心に残っている。今回の経験を通じて、中国についてもっと学びたい、10年後も20年後も中国と日本がよき隣人であるよう、身近な場所から日中友好に貢献できる人間でありたいと強く思った。そのためには、中国を表面的ではなく、国際情勢や中国社会を鋭く分析し、「これまでの中国」と「今の中国」に対して真摯に向き合い続けることが大切であると思う。

また、中国青年と対話を重ねる中で、“耳を傾けて聞く”姿勢がいかに大切であるか気づかされた。相互に学び合う対話の価値とは、自分の「正しさ」や「常識」を一方向的に主張することでなければ、「配慮」によって何も言わないことでもない。耳を傾けることは、相手に心を開いて受け入れる姿勢であり、相手の立場になって物事を考えることである。そして差異を尊重するということは、違いを恐れるのではなく、またそれを乗り越えようとするが故に互いの個性や価値観を台無しにすることではないのだと感じた。今回の経験を通じて学んだ「対話のあり方」で、マイナスをプラスの価値へと転換できる力をつけていきたい。そして、相手から学び続け、より豊かな考えを持ち、心を耕し続ける人間でありたいと思う。今後もより多くの人々が一衣帯水の関係にある日中の友好の歴史と未来に誇りを持てるよう、この経験を身近な場所から伝え社会へ還元するとともに、日中の未来に希望をつなぐ架け橋となれるよう努めていきたい。

最後に、日中両国での開催を通じて、多くの学びの機会をいただき、本事業の実施にあたってご支援を賜った全ての方々に、心より感謝申し上げる次第である。



散策グループで火鍋を楽しむ



東京フォーラム歓迎会でのオタ芸披露

ディスカッション成果

2024年度日本・中国青年親善交流事業 東京フォーラム ディスカッション成果（全体）

日 時	2024年11月20日
場 所	都市センターホテル
テ ー マ	テーマ1：気候変動・環境 サブテーマ1：意識改革 サブテーマ2：経済両立 サブテーマ3：法律と政策 テーマ2：少子高齢化 サブテーマ1：高齢化とIT サブテーマ2：地方における高齢化 サブテーマ3：子育てに優しい社会づくり
参 加 者	日本青年15名 中国青年18名
スケジュール	9:00 - 10:30 基調講演(東京大学 川島真教授) 10:30 - 13:00 昼食 13:30 - 15:00 テーマ別施設訪問 環境省地球環境局 15:30 - 18:00 ディスカッション 18:00 - 19:00 夕食 19:00 - 20:00 ディスカッションの続き(自主活動)

テーマ 1：気候変動・環境

サブテーマ	参加者
意識改革	日本青年2名 中国青年3名

成 果

1. 日本青年の発表

我々は、気候変動について、意識改革をテーマにディスカッションを行った。世界が抱える気候変動の問題について、どのようにすれば人々の意識を変え、行動変容を促すことができるのかという観点で話し合った。日本の二酸化炭素排出のおよそ半分が工場やサービス業などのいわゆる企業からのものであるという事実をふまえ、日本の企業における環境問題への取り組みに着目した。ここでは、カーボンプライシング、ESG金融、3 R+Renewableの3つの事例を紹介した。それぞれの取り組みによって、企業がブランドイメージや事業拡大のために、環境保護の努力をするようになるという一連の流れを説明した。

2. 中国青年の発表

中国側は、環境への意識改革として、メディアの影響力や政府主導の政策などの観点から発表した。中国のメディアに関して、テレビでは環境保護活動を紹介する番組が放送され、テレビをあまり見ない若年層が情報を受け取る媒体としては、主にSNSが挙げられるという説明を受けた。その他にも、アリペイなどのアプリを通じて、人々がゲーム感覚で環境保護に関われる仕組みや、ゴミの分別やリサイクルなどの行動に対して、炭素排出量削減分のポイントを付与する脱炭素Dayなどの取り組み、そして、農業や食品分野からの二酸化炭素排出が多いという事実を紹介していた。

3. 総括

日本では、環境問題への取り組みについて企業をターゲットに意識改革を行っているのに対して、中国では、政府が打ち出す政策によって、国民一人一人に意識改革を促しているという点で大きく違いがあることに気づいた。しかし、気候変動がもたらす環境への影響については、日本も中国も同じ課題を抱えており、特に脱炭素に向けた取り組みは、両国とも重要視していることも学ぶことができた。

今回のディスカッションで、気候変動をはじめとする環境問題は、お互いの国だけでなく、世界全体で取り組むべき課題であることを再認識した。中国の強みである、政府主導のキャンペーンや、アプリなどによる大規模な行動変容など、日本が取り入れるべき施策が多いことに気づかされた。

テーマ 1：気候変動・環境

サブテーマ	参加者
経済両立	日本青年3名 中国青年3名

成 果

1. テーマ設定の経緯

気候変動・環境にまつわる問題へ取り組むと同時に経済発展を目指す場合、どうすれば両者のバランスが取れるのか、またそれらは両立可能なのか、という観点から本テーマを設定した。

2. 日本青年の発表

経済活動との両立を目指す日本の取り組みを紹介するにあたり、聞き手が本テーマと身近な生活とを結びつけられるよう意識した。具体例として、SDGsの目標達成にも有益であろう以下の三点を紹介した。

- (1)ごみの分別を徹底することで経済効果を生み出す自治体
- (2)個人が気軽にできるクールビズ及びウォームビズ
- (3)電気自動車(EV)政策における主要自動車メーカーの事例と日本が目指す脱炭素社会の実現

中国では近年、大都市を中心にごみの分別が実施されている。その影響か、後日行われた東京散策では中国青年が公園に設置されたごみ箱に関心を示しており、ディスカッションでの学びを深めている姿が目に残った。発表を通して日本の暮らしに根付いた環境意識と行動を伝えられたのではないかなと思う。

3. 中国青年の発表

中国青年団の発表は「エネルギー経済政策」「エネルギー転換」「脱炭素と経済のWin-Winの方法」についてであった。発表のうち特に興味深かったことは二つある。

一つ目は、脱炭素社会実現へ向けた日中の協力関係についてだ。ある中国青年の考察によると、日本は発電効率を高める技術、例えば水素エネルギーや再生可能エネルギーが強みであり、中国は大規模に運用する資金とノウハウがあるという。双方の特長を活かした協力関係の構築は、建設的な提案で聞く者を惹きつけた。

二つ目に、中国で電気自動車(EV)の普及率が高い要因として、国の政策の充実が挙げられる。中国では新エネルギー車を購入する際に10%の税金が免除されるほか、公共交通機関の電動化も経済効果に繋がっているそうだ。

4. 所感

気候変動・環境は国際社会が一丸となって取り組むべき問題であり、日中両国の立場から意見交換をするなかで、互いの強みや先進的な取り組みを再認識することができた。今後はエネルギー協力等において日中の技術や能力、資金の融通を高めることで、気候変動・環境にも有効な対策を講じることができるのではないだろうか。それにより、日中両国の更なる発展も望めると考える。

テーマ 1：気候変動・環境

サブテーマ	参加者
法律と政策	日本青年2名 中国青年3名

成 果

1. 日本青年の発表

日本では国際条約に基づく、2つの法律が気候変動対策の根幹となっている。気候変動に適応するための気候変動適応法と、気候変動を防ぐための地球温暖化対策推進法だ。

1つ目の気候変動適応法は、気候変動への適応によって、安全安心で持続可能な社会の構築を目指す法律で、地方自治体に気候変動への対策計画を作ることを促している。2つ目の地球温暖化対策推進法では、2050年までにカーボンニュートラルを実現することを目指しており、防止策を講じる自治体を支援している。環境庁は地方自治体が気候変動対策計画、地球温暖化防止策を作成する際のマニュアルを提供するとともに、各自治体の対策計画および防止策を公表し、より多くの地方自治体が気候変動への適応および防止に取り組めるよう、環境を提供している。

2. 中国青年の発表

中国では2020年に習近平国家主席が発表した「3060ダブルカーボン」という政策が、気候変動対策の根幹となっている。この政策では、2030年までに温室効果ガス排出量を減少に転じさせるカーボンピークアウトを達成し、2060年までにカーボンニュートラルを達成することを目指している。具体的には、温室効果ガスや有害ガスの排出を規制している。

さらに、2021年に白書「気候変動に対処する中国の政策と行動」を発表した。これにともない、生態学および環境保護の分野で 20 以上の法律が制定及び改正され、法律上の空白が埋められるとともに、炭素排出量取引管理に関する暫定規則の策定が積極的に進められている。

3. まとめ

このディスカッションを通して、日本では政府が作成したマニュアルをもとに、地域が実態に沿った対策を練るという、ボトムアップ形式が取られ、中国では民主監督チームが支えるトップダウン形式で、全地域に画一的な政策がとられていると気づいた。日本と中国では政策の実施の仕方は異なるが、現在の環境の状況を問題視し、環境を良くしたいという共通の認識のもと、環境問題の解決に向けて取り組んでいる。

テーマ 2：少子高齢化

サブテーマ

高齢化とIT

参加者

日本青年3名

中国青年3名

成果

1. テーマ「高齢化とIT」について

私たちは「高齢化とIT」をテーマに、ITを活用した高齢化対策に関する日本と中国の協力についてディスカッションを行った。現在日本では65歳以上の高齢者が総人口の3割近くを占め、社会保障費の増大や介護人材の不足といった様々な社会問題を引き起こしている。そこで、ITを活用した高齢者の生活の質の向上のための取り組み、医療・介護サービスが展開されている。中国も同様に深刻な高齢化に直面しており、ITを活用した先進的な取り組みに力を入れている。

ディスカッションの結果、両国はそれぞれ異なる歴史・文化・社会を持ちながらも高齢化という共通の課題を抱えており、互いに協力し合うことでより良い解決策を見出すことができることを確認することができた。次の章からは具体的な今後の日中協力の方法について言及する。

2. 今後の日中協力について

ディスカッションのまとめとして今後の日中両国の高齢化対策における協力体制をピラミッド状で下から技術レベル、製品レベル、実践レベル、政策レベルの4段階に分けて考えた。

初めに「技術レベル」と「製品レベル」における協力についてである。日本は長年の高齢化対策の経験から細やかな配慮ができた福祉サービスを提供できる強みがある。一方中国は、新しいIT技術をすぐに社会実装する能力に優れている。両国がそれぞれの強みを活かし共同で技術開発や製品開発を進めることで、双方の優れた技術・製品をより発展させることが出来ると考えられる。

次に、「実践レベル」と「政策レベル」における協力である。「実践レベル（成功事例の共有）」、「政策レベル」の協力では、それぞれの国で社会実装にあたっては国の文化、制度をどのように考慮できるかが課題となる。例えば、日中両国で介護に対する考え方や介護保険制度は大きく異なる。日本は介護保険が充実しており、将来介護が必要になった場合に適切なサービスを受け取ることができるよう社会全体で支え合う仕組みがある。一方、中国は介護保険が日本ほど浸透していないが、代わりに伝統的に家族・親族が高齢者を支える仕組みがある。このように、両国には違いがあり協力が容易ではないと考えられるが、人的交流を促進し互いの優れた事例やシステムを深く理解することで協力することができると考えられる。

3. まとめ

高齢化は日中両国が共に抱える大きな課題であるが、同時に両国の共通項として新たな協力体制を築くことができる可能性を秘めている。両国は互いに学び合ってきた長い歴史がある。ITを活用した高齢化対策に関しても継続的な交流を続け相互理解を深める必要がある。私たち日中青年は両国の架け橋として貢献していきたい。

テーマ 2：少子高齢化

サブテーマ

地方における高齢化

参加者

日本青年2名

中国青年3名

成果

1. 「地方」という言葉の捉え方の違い

ディスカッションを進める中でテーマにある「地方」という言葉の定義自体が日本と中国で異なっていることが分かった。中国側は「地方」を、中国の東北地方や西南地方、さらには農村地域などのような、主に地方行政区画や地域を指す意味で捉えていた。その一方で、日本側は「地方」を、東京・名古屋・大阪の三大都市圏のような、人や物が集中しているところ以外の場所という意味で認識していた。同じ「地方」という言葉でも、日中両国間で解釈に違いがあることは非常に興味深い発見だった。このため、これから地方における少子高齢化について議論を進める際には、「地方」を人口過疎化が進んでいる地域と定義し、話し合いを進める必要があると学んだ。

2. 日本と中国での共通点

ディスカッションを進める中で、日本と中国の間には、共通点と異なる点があることが分かった。共通点の例をあげると、「地方から都市部への人口流出」や「車やバスなどの交通サービスの縮小」、さらに産業の中でも「介護や医療業界が厳しい状況」となっている点が、両国ともが抱える問題として明らかになった。このように、日本と中国が直面している「問題」については似た部分が多く見られた。こうした共通の問題に対し、未来をつなぐ「若者」をいかに地方へと誘致していくかが大事である、という意見については両国の青年で一致した。ディスカッションを通して、共通の問題について国境を越えて協力することでより早く問題解決の道に進めると思った。

3. 日本と中国での異なる点

一方で、日本と中国がそれぞれ取り組む対策については異なる点が見られた。その1つに、技能実習生の受け入れに対する姿勢の違いがある。日本では、海外から技能実習生を招くことが少子高齢化に対する1つの策になり得るとして積極的に進められている。それに対して中国では、海外から技能実習生を招くことはほとんどないと言う。この違いの背景には、日本と中国の間における人口規模の差がある。日本は、地方での人員不足を国内で賄えるほど人口が多くないため、海外から人材を確保することで、国内での人材不足を賄おうとしている。その一方で中国は国としての人口規模が多いため、海外からの人材に頼らず、国内で人材を確保しようとしている。さらに、ディスカッションを進める中で中国ならではの取り組みがあることも知った。中でも特に興味深かったのは、気候の違いを活かした取り組みだ。これは南に住むお年寄りの方を東北地方に招き、氷の祭りなどを通して涼しい東北部の魅力を伝えるというものだ。日本は国土が小さいぶん、国内での気温の差が中国に比べて少ないため、この取り組みは広大な土地を持つ中国ならではの活動だと思った。

4. 感想

ディスカッションを通して、日本と中国は隣国であるにも関わらず、こんなに違うところがあるのかと驚くことが多くあった。まず、日本は中国より一歩前に少子高齢化の段階に入っている。また、中国は人口規模が大きいぶん、高齢化の進む速度は日本に比べてより急速で広大なものとなっていくだろう。その意味で、日本と中国では少子高齢化の規模やスピードの面で異なる部分がある。だが、今回話し合う中で両者の間に似た部分や問題もあると気づいた。そのため、両国が抱えている問題の中で重なる部分を見つけ、その解決に向けて互いの取り組みを知ること、日本と中国が共に協働するきっかけになるのではないかと感じた。

テーマ 2：少子高齢化

サブテーマ

子育てに優しい社会づくり

参加者

日本青年3名
中国青年3名

成果

1. 日本青年の発表、質疑応答

まず日本側は、日本における少子化の現状を踏まえ、現在国内で施行されている政策について共有した。具体的には、出産後の「産後ケア」、育児関連の給付・手当などの「出産育児一時金」、「児童手当の拡充」、「児童扶養手当拡充」、「自営業・フリーランス等の育児期間の国民年金保険料免除」、「男性育休取得推進」、そして妊娠以降から始まる「伴走型相談支援」だ。これら、各項目について紹介するとともに、メンバーにゆかりがある地域での取り組みも合わせて紹介した。例えば、神奈川県横浜市においては、「パマトコ」という横浜市の公式アプリを作り、男性の育児休業の取得を促進する取り組みが行われている。これらを紹介することを通じて、私たち自身も自分たちの身近なところで行われている取り組みについて目を向けることができた。

私たちの発表に対し、中国青年からは、「父母ともに休暇をとるという状況は、労働力の不足につながるため、社会全体の損失ではないか。それにも関わらず、日本において育児休業支援の制度が拡充しつつあるのはなぜか。」という質問が出た。それに対し、日本青年は、「確かに働き手の減少は、一時的に社会経済に悪影響を与える。しかし、長期的に考えると、子どもの数を増やした方が労働力を確保できるため、将来的には社会全体の利益が増える。」と回答した。

2. 中国青年の発表、質疑応答

中国側は、中国の現状の課題を踏まえた上で、中国が今後行うべき政策について発表した。具体的には、人口構造のバランスが取れていないことや労働力不足、経済的な不安などの現状に対し、社会保障制度を最大化し、国家の長期的な発展を目指すことなどである。

中国青年の発表に対し、日本青年からは「現に中国では労働力が不足しているのにも関わらず、若者の仕事が見つからないのはなぜか？」と質問した。それに対し、中国青年からは、「仕事自体は多くあるが、若者が望む仕事に就職することが難しい。」という回答を得た。要は、激務薄給の仕事に対する人材不足が深刻化しているということだろう。この現状は、日本とも類似していると考えられる。

3. 総括

これらの日中両青年の意見交換を通じて、両国は少子化という社会問題において様々な共通の現状や課題があることが分かった。共通点としては、仕事と家庭の両立は難しく、孤立しやすい子育て家庭を地域全体で支えることが求められている。また、両国には社会保障制度や出生政策など、多様な違いもあり、そこから互いに学び合うことも可能である。

子育てに優しい社会の実現に向け、日中両青年にできることは、積極的な交流をもとに、互いの国の現状やそれに対する取り組みについて発信し合うことである。そして、国際協調の精神を礎に、少子化にかかわる多様な分野で連携・協働し合うことで、より良い未来を実現していきたい。

ディスカッション成果

2024年度日本・中国青年親善交流事業 北京フォーラム ディスカッション成果

日 時	2024年11月25日
場 所	二十一世紀飯店
テ ー マ	トピック1：青年と質の高い人口発展 トピック2：青年と地域の協調発展
参 加 者	日本青年15名 中国青年18名
スケジュール	8:45 - 9:15 基調講演(中国の質の高い人口発展戦略) 9:15 - 10:00 ディスカッション 10:00 - 10:10 休憩 10:10 - 10:40 基調講演(中国における都市と農村の融合と発展の新パターン) 10:40 - 11:25 ディスカッション 11:25 - 11:30 会議終了

【基調講演の概要】

トピック1：青年と質の高い人口発展(小池 秀雅)

中国人民大学人口と発展研究センターおよび人口と健康学院の宗健教授より、中国の人口の質の高い発展戦略についての講義を受けた。

優れた質、豊富な総量、最適化された構造、合理的な分布を兼ね備えた現代的な発展を目指し、その中で構造面における少子高齢化が人口の質の高い発展を制約している。質の高い発展に導かれ少子化支援対策の制度を改善し子育てに優しい社会の建設を推進し人口の長期的でバランスのとれた発展を促進することで人口動体の堅固な基礎を築き中国式近代化を達成するという目標を掲げている。

少子高齢化については質の高い人口発展という観点から議論されているところに日本との違いを感じた。かつて世界一の人口になり経済的にも目覚ましい発展を遂げた影響を受けて現在の政策が展開されている。計画生育政策など、人口統計学的変数的視点や、社会経済構造を人口構造にあわせるなど、非人口動態変数的視点も話の中であった。日本の法律や政策からこれらを取り入れることは厳しいと感じるが、根本的な少子高齢化の原因は日本と共通する点も多く、それらについては日中に限らず少子高齢化問題を抱えている国々で横断的に議論することの重要性を認識できた。

トピック2：青年と地域の協調発展 (有賀 瑛美)

中央民族大学および中国国際貧困削減センターの曲強教授より、中国が実施してきた農村貧困削減の成果と、それを基盤とした農村振興の取り組みについての講義を受けた。土地改革や改革開放政策といった歴史的背景に加え、貧困層を対象とした具体的な施策が紹介されており、中国政府が一貫して貧困削減を国家の重要課題として位置づけてきたことが強調されている。

とりわけ印象的であったのは、農村振興における日中間のアプローチの違いである。日本では、農協や地域ブランド化といった民間の取り組みが農村振興に大きく寄与している一方、中国ではインターネットや電子商取引が急速に発展している。また、ソーシャルメディアを活用して地方の魅力を発信し、それをコンテンツ化することで地方を身近に感じさせ、訪問を促すインセンティブを整えている点が興味深い。講義中に視聴したコンテンツには、農村の生活がリアルに映し出されており、細部にまで工夫が施されていることが印象的であった。現地住民ならではの発信が外国人旅行者の農村体験に直結し、農村の魅力を広めると同時に農業や観光業の発展、収入増加にも寄与していると

いう事例には説得力があった。これらの取り組みには、日本が参考にできる多くの示唆が含まれていると言える。全体を通じて、中国の農村振興が国家規模の戦略として推進されてきたスケールの大きさに驚かされた。また、ソーシャルメディアを活用した現代的な手法が農村の未来に新たな可能性をもたらしていることは意義深い。一方で、農村と都市の格差が完全に解消されたわけではなく、持続可能な発展を実現するためには多くの課題が残されていることも学んだ。他国の事例や成功体験を相互に学び合い、補完し合うことで、より良い農村振興モデルの構築が可能となると考える。

事業評価アンケート（日本青年）

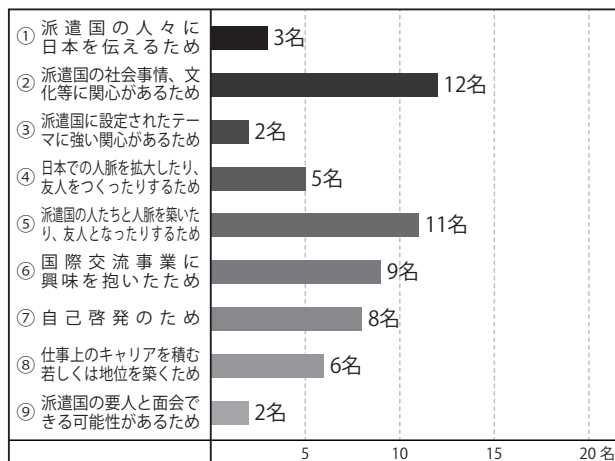
2024年度日本・中国青年親善交流事業

アンケート対象者：団長、副団長、渉外を除く日本参加青年15名

1. 全体評価

(1) あなたは、なぜこの事業に参加したのですか。

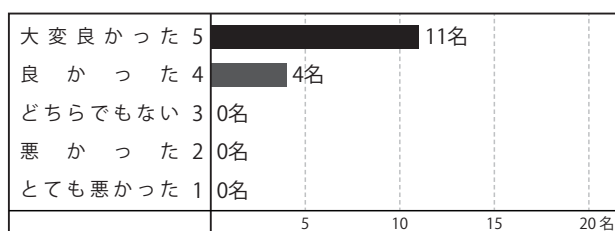
（複数回答可）



その他

- ・自分の目で中国を見たかったから。

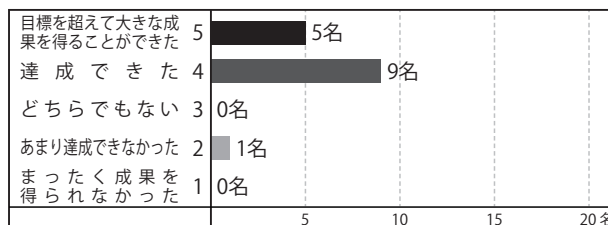
(2) 事業全体をどのように総合評価しますか。



- ・本事業でしか訪問できない場所、お会いできない方ばかりで、単に旅行に行ったのでは得られない知識や経験ができた点、また同世代の中国青年との交流やディスカッションは互いに自国を見つめ直し相手国を認める良い機会となったことなどから、両国の友好を深めるために今後も広く続けていくべき大切な事業であると思う。
- ・全体として、非常に参加して良かった。この事業に参加する前と後では、物事に対する見方、特に日本における見方に変化があったと感じた。事業を通じて、世界における日本の立ち位置を把握し、日本国内の視点のみならず、外からの視点を待ち合わせる必要があると改めて認識した。
- ・全体的なプログラムとしてはとても良かったです。評価を4とした理由としては、日本側と中国側とで本プログラムの意義が若干異なっているように感じたからだ。日本側はディスカッションメインの真剣なプログラムだという認識だったのに対し、中国側

は観光や文化交流メインという認識だったように思うので、そのすり合わせが必要だと感じた。

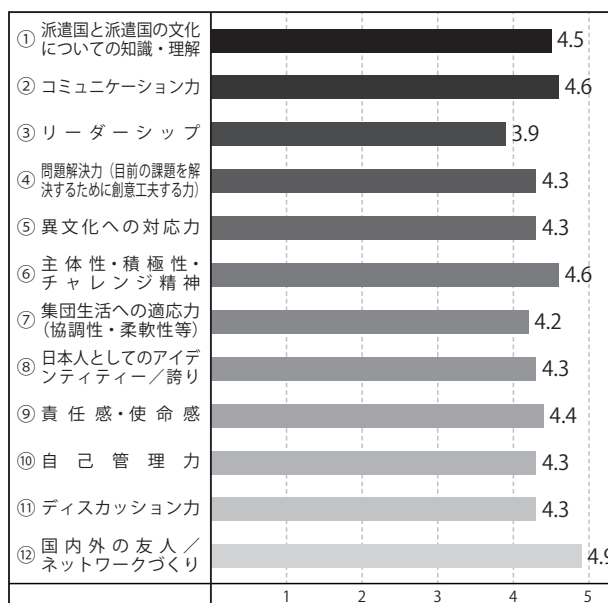
(3) この事業に参加するにあたって、あなたの目標は何でしたか。また、その目標は達成できましたか。



- ・俯瞰的な視点を持つこと、国際的なリーダーシップの取り方を学ぶこと。
- ・これまで実施してきた民間交流とは違い、国の代表として中国と関わる。今まででもかなり中国プログラムには参加をしてきたが、これまでとは違う視点で中国を見れるような体験を積みたい。
- ・自分が抱いている中国に対するイメージと、実際のイメージはどのように違うのか、言語化をすること。
- ・コロナ禍に叶わなかった中国青年との対面交流を果たすこと。日中友好の思いを次世代に繋ぐこと。

(4) 以下の①～⑫までに掲げる項目に関し、この事業全体を通じて得られた自らの成長等への効果について、以下の5～1のうち、該当すると思われるものを選択してください。

5：大きな効果があった／4：効果があった／
3：どちらでもない／2：あまり効果がなかった／
1：効果がなかった

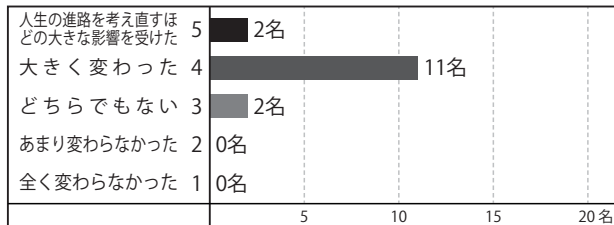


※数値は参加青年15名の平均

(5) 上記(4)に掲げたものの以外で、事業参加によって具体的に得られたものがあれば記入してください。

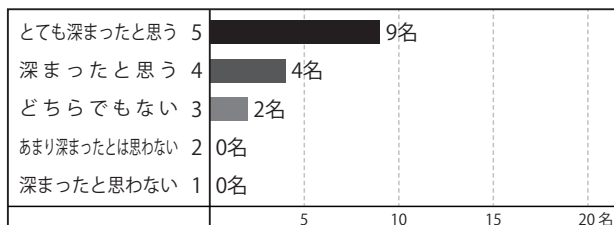
- ・自国に対する理解、タイムマネジメント力。
- ・物事を多角的・多面的に見ようとする意識。

(6) あなたはこの事業への参加を通じて、人生、社会などについての考え方が変わったと思いますか。



- ・中国青年との交流の中で、自分から歩み寄ることの重要性を実感した。今まで挑戦してこなかったことをやってみようというメンタルが前に比べて備わったと感じる。
- ・さまざまな人がいて、国や文化が異なる人でも一人の人間だとして接することができるようになった。
- ・今回の参加を機に、今後も日中事業に携わりたいと思うようになった。来年から社会人として大学で働くことになるが、国際的な青年交流を推進する立場として、中国との大学間交流や学生交流、研究員交流等々、様々な面で今回学んだ主体性や物事を客観的に考える力、寛容性を活かして活躍したい。
- ・いかに自分が世界を知らないかを思い知らされた。世界中の国に関して、ネットで得られるような情報はほんの一部に過ぎず、現地に足を運ばなければ得られない気づきの方がむしろ多いことを学んだ。百聞は一見に如かずという言葉の意味を改めて理解し、今後とも直接見て経験することを大切にしながら生きていきたいと思えた。

(7) この事業を通じて、あなたと派遣国の人々との相互理解が深まったと思いますか。

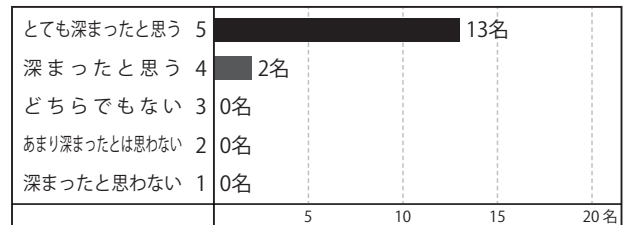


- ・お互いの国の歴史や文化について話す中で、中国のことだけでなく、日本についての理解も深まり、日本に対する相対的な見方を知ることができた。
- ・日本人の中国人に対するイメージ、また中国人の日本人に対するイメージをそれぞれ持っていたかと思うが、実際に訪問し交流することで、新しい価値観や自分が持っていた偏見に気づき、互いを認め合うことができた。日本青年も中国への関心がより一層

高まり、今後も活発な青年交流がなされると思う。

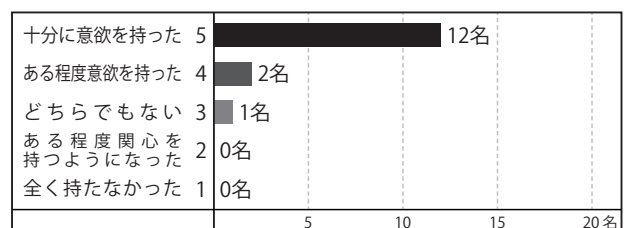
- ・ディスカッションを通して共通課題に対して違いを超えて協力することができることがわかった。ただ、テーマや言葉に関して意味や概念のズレがあり、成果発表で中国側が発表していた内容と実際に日本側が発表した内容との間に相違があった。

(8) この事業を通じて、あなたと派遣国の人々との友好が深まったと思いますか。



- ・はじめは形式的な会話だったものが、10日間で様々なことについて話すことができたため。
- ・非常に深まったと思う。なぜなら、私たちは10日間をともに過ごし、たくさんのお話をすることで、良い友人になれたからだ。仲良くなった数人の中国青年とは今でもWeChatで連絡を取りあっており、お互いについて理解し続けている。
- ・10日間共に行動できたからこそ、個の交流を通してお互いの人となりを知ることができた。
- ・国籍を考えず、一人の友人として青年と接することができた。
- ・とても友好を深めることができたが、ここから先に関係が継続するかは今後のかわり方次第である。

(9) 事業参加を通じて、社会貢献活動を始めたい、参加したいという意欲等を持ちましたか。

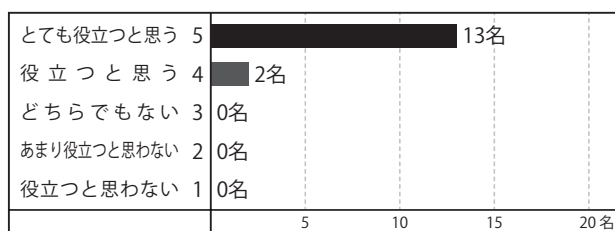


- ・このプログラムを通して、行動することで状況が変わることを実感したので、今後も社会貢献活動は続けていきたいと思っている。
- ・今回の事業を通じて、知らない世界を知ること、多くの人と関わりながら問題解決をしようとするものの楽しさを学べた。
- ・IYEOの活動には積極的に参加し、歴代の参加青年とも交流をしていきたいと思った。
- ・青年代表として参加させていただき、非常に貴重な経験をし、自分自身の考えや経験が豊かになったことから、その感謝を次の世代へ繋げていく使命があると思うため、積極的に社会貢献活動に取り組んで

いきたい。

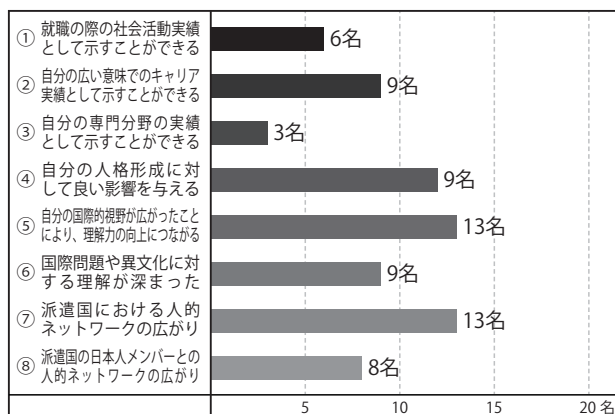
- ・今までの社会貢献活動だけでなく日中友好のための社会貢献活動を始めたいと考えている。その第一歩として帰国者報告会の実行委員を頑張りたい。

(10)-1 この事業は、あなたの将来に役立つと思いますか。



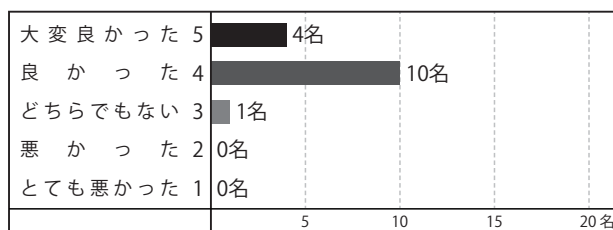
- ・中国についてのイメージの変化、団体行動での協調性など多くのもの学ぶことができた。この経験はきっと将来に役立つと考えている。
- ・日本にない中国の良さや日本が見習うべき点を多く学べた一方で、日本の強みや良さについても中国という比較対象ができたおかげで相対化できた。このような良さを大切にしつつ、見習うべきところは取り入れつつ将来につなげようと感じた。
- ・人との出会い、縁から思わぬ形で中国との関わりができると思うし、自分からそのチャンスを掴んでいけるように人脈を大切にしたい。
- ・今回の経験は、私の人生において唯一無二のものであり、財産となった。実際の訪問と交流を通して、日本にいただけでは知ることのなかった考え方や価値観が自分の中にインプットされていくのを感じた。この経験を昇華し、事後活動や他の事業への関心を高め、積極的に行動していきたいと思った。
- ・観光では経験できないことを、訪問という形で経験しているということは大きな強みだと思う。また、社会人メンバーの先輩からも自分の取り組み方を客観的に評価してもらえ、将来目指す姿が見え始めた。

(10)-2 上記において、5～4を選んだ方は、どのように役立つと考えるか、以下の内容から当てはまる項目を選んでください。(複数回答可)



2. 東京フォーラム（東京都プログラム、茨城県プログラム）について

(1) 東京フォーラム全体をどのように評価しますか。



- ・事前の準備を持って臨んだディスカッションにより、両国と比較して共通点・相違点を踏まえて今後の協力体制について話し合うことができた。
- ・ディスカッションテーマに関する多くの講義や地方の見学など、実際に環境問題などの国際課題に取り組む方々のお話を伺って大変勉強になった。日本側がホストという立場で、青年たち自らが積極的に行動し、プログラムを円滑に進められた。
- ・東京フォーラム全体としては成功したと思う。特に中国青年との距離感や参加態度が大きく変わったのは東京散策であり、それを機に一気にコミュニケーションがしやすくなった。散策についてはかなり凝ってプランニングをしてよかったと思う。
- ・ディスカッションや講義が中心で、知識としての情報量は多かったが、それをすべて取り込めたかは疑問。もう少し現地での活動等の時間を増やしても良いかなという印象。
- ・ディスカッションに臨む姿勢に関して、日中でずれがあった。資料の作りこみなど、両国青年ですり合わせができればよりよかったと思う。

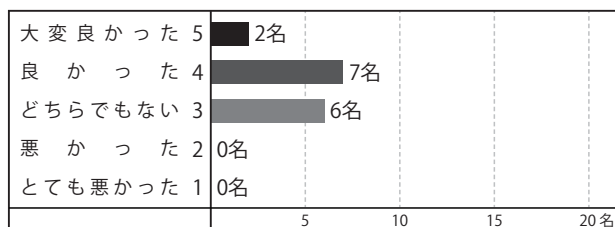
(2) 東京フォーラムから得たこと、発見したことは何ですか。

- ・中国青年とのディスカッションで、お互いの前提条件は異なっても大きな課題等は共通項が多い。お互いに協力できることは沢山ある。
- ・前提の違う中で会話することの難しさ。相手の立場で発言することの重要性を改めて感じた。
- ・「日中両国は絶えず人的交流を行うべきである」ということ。
- ・中国青年の仕事の進め方と日本青年の仕事の進め方の違い。
- ・どれだけ細部にこだわるか／納期意識／論理の緻密さなどは日中でかなり違いがあると感じた。
- ・環境省や子ども家庭庁訪問時に感じた、日本と中国はかなり共通した課題を持っているということ。しかし、人口や国の政策や施行等々状況が異なる場合があり一筋に協力できるとは限らないと知った。

(3) 東京フォーラム中、最も印象に残ったのはどのようなことですか。

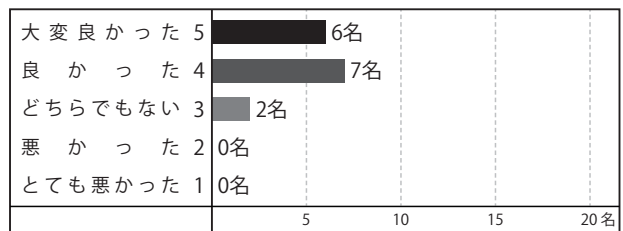
- ・茨城県歓迎会の中国青年パフォーマンスで歌を聞いて自然と涙が出た。海外の歌を生で聞くのはおそらく人生で初めてだった。全ての歌詞の意味が分かる訳でないのに感動した。
- ・エクスカッションで中国青年とともにご飯に行き、イルミネーションを見ることができ、話したことの無いメンバーとも交流することができた。
- ・ディスカッションの延長で、興味関心を抱いた相手のプレゼンテーション内容に対して追加質問を食事中にし、その会話を通して日中比較をすることができたことです。

(4) 茨城プログラムでの地元青年との交流をどのように評価しますか。



- ・地方創生をテーマとしたディスカッションを通して、外側からの意見と、実際に地方で暮らす地元青年の意見を照らし合わせ、イメージと現実のギャップやリアルな体験について知ることができ、そこに中国青年の意見も加わって互いに活発な議論ができた。
- ・何年経っても本事業に貢献したいというIYEOの皆様の気持ちと、IYEOのネットワークの強さを実感でき、是非私もいつか自分のプラットフォームを活かしてこれから参加される方のサポートをしたいと感じました。茨城ではこれでもかというほど大変良くして頂き、心より感謝しております。
- ・地元青年との交流の中で、茨城への理解が深まったと感じた。一方、より多くの地元青年との交流がしたかった。全体的に地元青年との交流が少なく、食事の場面や、歓迎会での交流となってしまった為、地元青年による茨城案内などがあっても良いと感じた。その中で、今回であれば大学への協力が必要であるが、キャンパスツアーなどを行っても日中双方にとっても面白いのではないかと感じた。
- ・内容は良かったが時間が短すぎた。
- ・総合的にはよかった。ただ自分自身は中国青年との交流に偏っていたので、もう少し茨城青年との交流もすればよかったと思っている。

(5)-1 テーマ別視察先訪問をどのように評価しますか。



(5)-2 特に印象に残った訪問先を、印象が強い順に3つ挙げてください。

<こども家庭庁>

- ・少子高齢化に対する取り組みをさまざまおこなっており、もっと日本の政策に興味を持つ必要があると感じた。
- ・日本での取り組みを最前線で働かれている方のお話を通して、日本の少子高齢化のリアルを学ぶことができ、またどのような対策を講じているのか詳しく伺うことができ大変興味深かった。
- ・日本の出生率についての現状を学ぶことができたと同時に、東京都が行うマッチングシステムなどは、その後中国青年との会話の中で比較することができ面白かった。

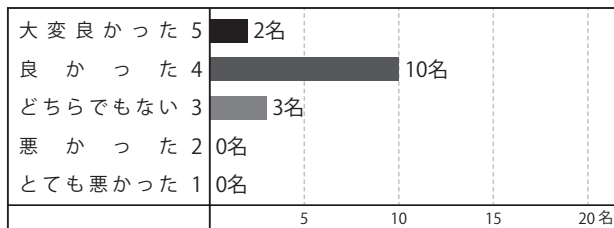
<茨城県庁>

- ・茨城県が打ち出す地方創生の政策について、研究施設の充実や人材育成、また企業・海外人材の誘致などを行っていることを知ることができた。
- ・茨城の地方創生にチャレンジ精神をもって取り組んでらっしゃるという大井川知事のお話を聞き、実績からも茨城県の持つ広大な土地と県民の皆様のパワーによって現在の発展している茨城があることを学べて興味深かった。
- ・どのような取り組みをして、どのような成果をあげているか県知事から直接聞くことができた。街並みを展望することで東京との違いも感じられた。

<サイバーダイナミクス>

- ・介護の未来を想起することができた。最先端の技術に触れ体験ができたことが非常に満足している。
- ・日本の技術力の高さに驚き、日本のアイデンティティーに改めて気づけた。
- ・日本最先端のロボット技術に触れ、中国と対等に技術革新を進められるのではないかと希望を持つことができたから。

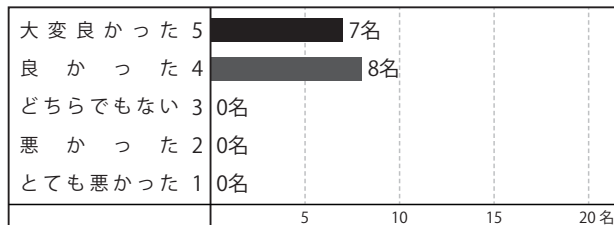
(6) ディスカッションプログラムをどのように評価しますか。



- ・日中のディスカッションに対する取り組みの違いが印象に残った。双方に良さがあり、そのような違いがあることを認めていくことが友好の第一歩かもしれないと感じた。
- ・中国に対して理解を深めるのとともに、私自身も日本について深く知ることができた。また、ディスカッションを通して、中国青年が問題意識を抱いている部分についても知ることができた。
- ・日中両国にかかわりのある内容で充実していた。省庁訪問での講義の後に、講義の内容に関して即座のディスカッションがあれば、より記憶に残りやすいと思った。
- ・メインのテーマから、視点を変えた具体的なテーマに分かれてより深い知識を得られた。ディスカッションの形式や準備期間にやや不満があったが、最終的には有意義な議論を交わし、新たな価値観を得ることができた。

3. 事前・出発前・帰国後研修について

(1) 研修内容をどのように評価しますか。



(2)-1 研修の良かったところをお答えください。

- ・日本代表青年としての意識を醸成させられる良い機会だった。
- ・事前研修では、チームビルディングからマナー講座、中国に関する有識者の方からの講座など、日本青年派遣団としての心構えを学ぶ機会であった。直前合宿では、全員が係別にリーダーシップを発揮して連携を行うことができ、本フォーラムに望むことができたように思う。帰国後研修では、お互いを感じたこと学んだことを言語化し共有し合うことで更なるステップが明確になった。
- ・中国に対する前提知識を4泊5日で学べたことで、自

分の興味・関心を見出すことができたから。また、センターの方々の手厚いサポートがありがたかった。

- ・日本の最前線で活躍される方々を講師としてお招きし、お話を伺えたことだ。今日の日中関係がどうか関係なしに、日中友好を体現するために必要なことを学べた時間だった。是非、事前研修と今回のフォーラムで学んだことを今後の人生において活かしていきたいと思う。
- ・派遣団としての心構えを改めて持つことができた。また、フォーラム中でのパフォーマンスに向けて、団員全員が顔を合わせて準備をしたことが良かった。

(2)-2 研修の改善すべきところをお答えください。

- ・団員の体調を考慮した時間配分。
- ・強いてあげるとするならばだが、事前研修の日程を学生の夏休み期間に充てて頂けるとより参加しやすかったと思う。
- ・事前研修からプログラムまでの期間をもう少し短くしていただきたい。
- ・ディスカッションの班ごとにまとまって行動することが多く、かかわりのないメンバーも少なからずいた。全員と満遍なくふれあえる機会が必要だと感じた。

4. 事業を終了して

(1) 今後、この事業の経験をどのようにいかしていきたいですか。

- ・日中の相互理解を深めるため活かしていきたい。具体的にはコミュニティ形成の分野で日本に住む中国人とその周囲の日本人の相互理解を促し、実際に中国を訪問するように伝えたい。
- ・事後活動に積極的に参加し、中国について興味・関心を持つ仲間を増やしていきたい。今回の事業を通じて得た中国に対する自分の印象を多くの人に伝え、自分の目で実際に見て知ろうとすることの重要性を伝えていきたい。
- ・IYEOの活動に継続的に参加し、今後の後輩たちにとって何か価値のある示唆や情報を提供していきたい。「自分が学ぶ・経験する」からシフトして「後輩・次世代へ機会や経験を提供する」役割になって、友好の輪を広げていきたい。
- ・挑戦に対するハードルが低くなり、さらに現地に足を運ぶ重要性を実感した。世界中を飛び回るうえで、観光や仕事ではなく、友人を作ることがいかに価値のあることかを学んだ。今後は国の隔てにとらわれずに自分から交流を仕掛け、友人を増やしていきたい。
- ・今回つながった中国青年との縁は絶やさないようにしていきたい。また今回の経験をもとに再び他国と日本の関係に興味をもったので、国際関係について

の学びを増やしていきたいと考える。また自分で主張することに対して抵抗感が薄まったので、これからプロジェクトを動かす際にこのスキルを用いていきたいと思う。社会問題に対してさらに問題意識を持つことができたので個人的にそういった関連で就職を考えていきたいと思った。

(2) その他、この事業の感想や事業に対する意見・提言があれば記入してください。

- ・日中青年が相互に行き来する形式がとてもよかった。今後は東京プログラムでもっと文化体験や散策の時間を増やし、中国青年に日本の魅力を知ってほしいと思った。
- ・たくさんの方のご協力と、見えないところでの配慮でこの事業が運営されていることを何度も感じた。今後もこの事業が多くの人に理解され、支援されていくように、募集時の事業内容の明確化や安全対策についての周知は重要であると考えます。
- ・大変貴重な経験をさせて頂き、ありがたかった。今回の経験は自分の日中友好活動の原点を再確認し、思い出すきっかけになった。得た学びは普段の業務や今後のキャリア選択においての武器になると感じている。

事業評価アンケート（中国青年）

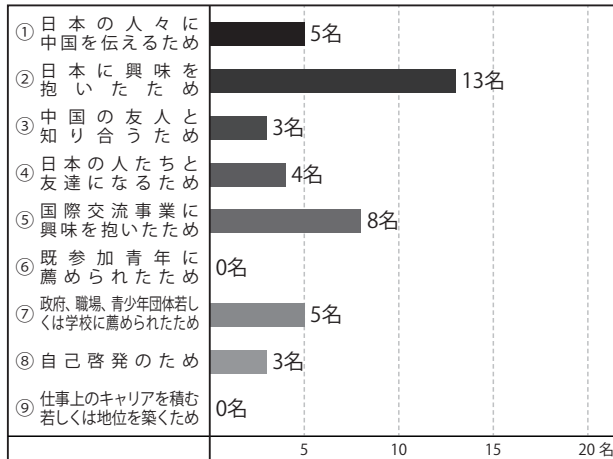
2024年度日本・中国青年親善交流事業

アンケート対象者：団長、秘書長を含む中国参加青年20名

1. 全体評価

(1) あなたは、なぜこの事業に参加したのですか。

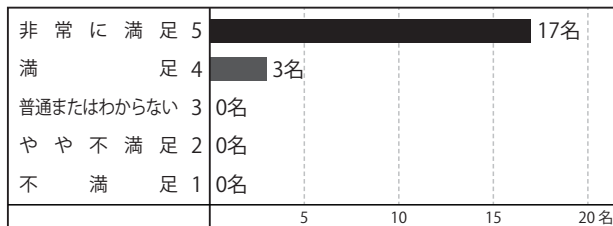
（複数回答可）



その他

- ・これまで来日経験がなく、この機会を活用して日本の風土や人情を実感したいと思った。
- ・日本語専攻の学生だが、日本文化を体験したことが無かったので参加した。
- ・観光とは違うルートで様々な業種の日本青年に触れ、両国の青年の考え方の違いや共通点を知ることができる。

(2) この事業を、どのように総合評価しますか。

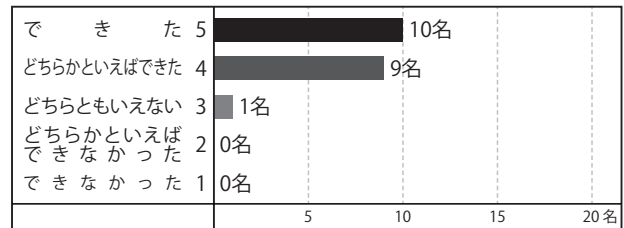


- ・細部に気配りが感じられ、質の良さもたくさん見受けられた。
- ・中日友好の歴史は長く、その意義も大きい。今回の活動の中で、日本の皆さんの熱意や日本の社会・経済の現状について身をもって感じ、多くの友人ができた。今後もこのような活動に参加したい。
- ・日本側の準備は十分かつ入念で、交流・ディスカッション、日常生活の全てで私の予想を超えていた。
- ・初めての日本で、物珍しいだけでなく、日本人へのイメージも一新された。日本は清潔で、景色もきれいで、国際化も進んでいて（特に東京）、人々の素養が

高い。

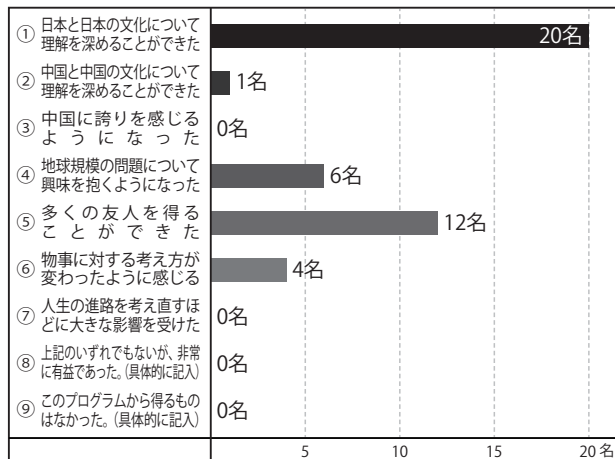
- ・多くの日本の優秀な青年と知り合うことができ感謝している。彼らの多くの見方や見解は、私の普段の論理と違い、時間のコントロールをととても重視していた。これらすべてに感心させられ、とても勉強になった。

(3) あなたが考えた事業の具体的な目標は何でしたか。また、それは達成できましたか。



- ・日本青年が今話題の社会問題についてどう考えているか理解し、交流すること。
- ・日本の文化や社会状況を理解し、日本の友達を作ること。達成できた。
- ・日本の社会や文化への理解を深め、自身の言語能力を高めること。
- ・日本の環境保護の取り組みや社会における分業、少子高齢化問題や都市・農村格差などの問題に対し実質的に理解すること。
- ・3つのテーマの観光や講義で、直観的に日本社会の現状を理解でき、知りたいと思っていたことの答えになった。
- ・皆さんとても友好的で、中国語を勉強している人も多く、日本青年の多くが（この事業を）重視していた。
- ・WeChatやLINEなど、将来でも連絡可能なアクセスを見つけた。
- ・日本青年はとてもしっかり発表の準備をしていて、彼ら自身も友好的で、活発で、環境省、こども家庭庁、茨城県の紹介や準備もしっかりされていて、とても良かった。

(4) あなたは、この事業からどのような成果を得ましたか。(複数回答可 2 つまで)

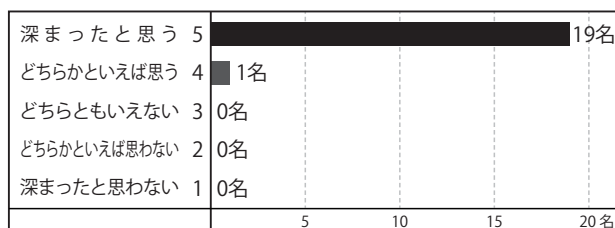


- ・時間厳守等、昔から言われてきた日本人の特徴について、多くの場面で目にすることができた。
- ・日本青年やスタッフとの交流を通じて、中日間の文化の違いを感じた。
- ・食・仕事・生活など日本の各方面への認識が深まり、関連する事柄について、身をもってたくさん経験した。日中両国はネット上と言われるような「二極化」状態ではなく、多くの問題において共通認識を持ち、多くの内容について検討していくことができると認識できた。
- ・人類運命共同体という背景のもと、各国の運命は密接につながり合っている。今回の訪問を通じて、気候変動・環境や少子高齢化問題の解決に向けた日本の努力や、日本の状況について理解することができた。

(5) この事業から、(4) で示したものの他に、具体的に得られたことがあれば記入してください。

- ・多くの皆さんと知り合い、これまでと違う角度から日本社会の状況を理解できた。
- ・自分自身を見つめ、よい習慣を身につけた。
- ・今後も長く友達と連絡をとりたい。
- ・日本青年と良好な関係や友情を築き、交流を通じて、これまでの考えが打破られた。

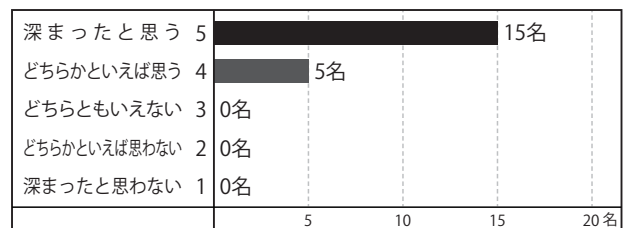
(6) この事業を通じて、あなたと日本の人々との相互理解が深まったと思いますか。



- ・中日両国は一衣帯水、青年同士でたくさん交流すれば、互いの認識が深まる。

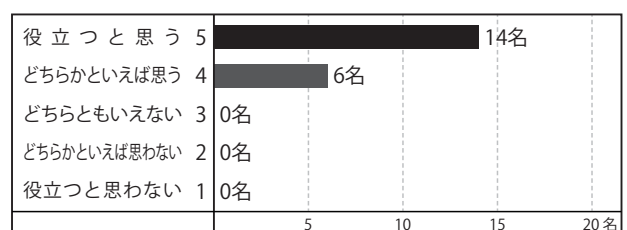
- ・同じテーマについて、両国の異なる措置や方策も、出発点はおおむね一致している。
- ・日本政府の考え方を、その立場に立って理解するようになり、日本の皆さんに好感を持つようになった。
- ・これまで日本の政策や社会状況についての理解は映像作品に限られていたが、今回は直感的に身をもって実感することができた。
- ・20代から友情を作るのは将来性が大きい。

(7) この事業を通じて、あなたと日本の人々との友好が深まったと思いますか。



- ・実際に日本の皆さんと交流することで、多くの固定概念が改善した。
- ・今回知り合った日本人の友人と一生の友達になりたい。
- ・日本の皆さんは礼儀正しく、彼らと一緒に過ごすのは楽しい。
- ・多くの新しい友人ができて、とても楽しく交流できた。彼らはみんな友好的で温かく、インスタや微信(WeChat)を交換した。
- ・限られた言語力で、より深い交流はできなかったが、友情の種は植えることができた。

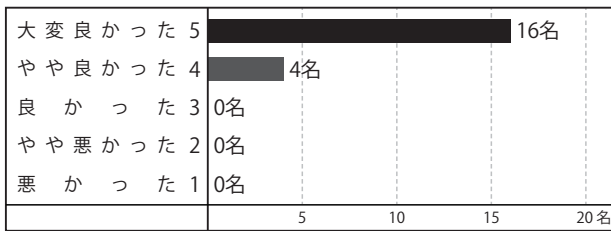
(8) この事業は、あなたの将来に役立つと思いますか。



- ・自身の研究や興味、進路に新しい考えが生まれた。
- ・茨城県は温かくホスピタリティにあふれ、インクルーシブな人材導入スタイルに心ひかれた。
- ・東京に留学したくなった。
- ・私の視野を広げ、将来の人生に大きな影響を与えてくれた。将来のキャリア選択などにもプラスに働くと思う。
- ・日本に対して新しい見方をするようになった。集団主義文化の下で個性を発揮させる、中国人と異なる国民的思考。

2. 日本での活動について

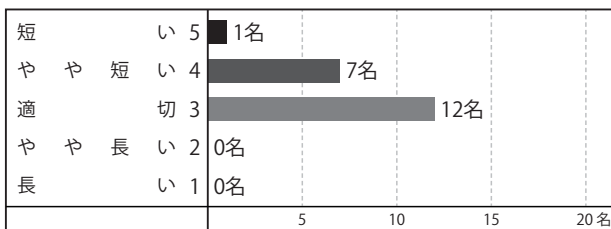
(1) プログラムの内容についての全体評価



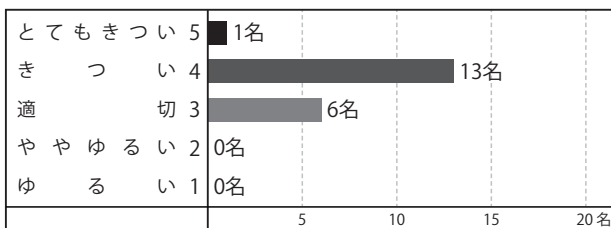
- ・スケジュールはとても細やかで整理されており、安心感があった。
- ・とても筋が通っている。
- ・総合的に見ると、各活動はテーマに即したもので、有意義な訪問であり、文化的・社会的体験でもあったが、時間が短いのが唯一残念だった。
- ・日本側は各活動で丁寧に説明・準備してくれて、日本側のおもてなしに感謝したい。
- ・日本側のスケジュール手配に感謝する。各活動を通じて、各方面から日本を紹介し、私の日本に対する理解を深めることができた。

(2) 期間及び日程について

①期間について（3が最も良い評価）

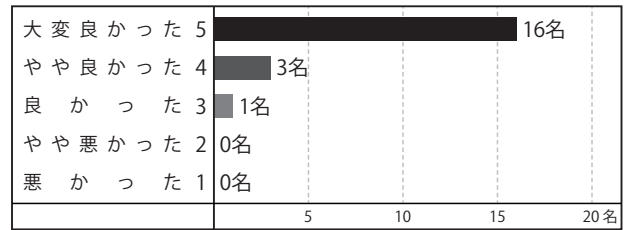


②日程について



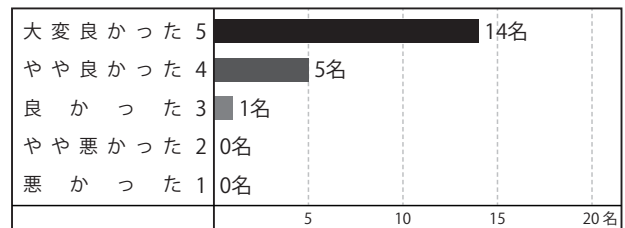
- ・快適で充実したスケジュールだった。
- ・期間を長くしてほしい。
- ・もう少し日数を増やし、余裕あるスケジュールにしてほしい。
- ・日本人の生活のリズムを感じて、敬服した。
- ・日程の長さは適切だが、スケジュールがタイトで、睡眠不足気味だった。でも全体的には良かった。

(3) 東京都プログラム（環境省訪問）について



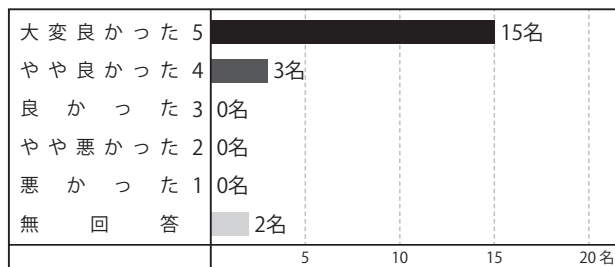
- ・政府職員による解説と回答に感謝する。
- ・環境省が官民一体となって低炭素なライフスタイルを追求する動きを推進していることが分かった。
- ・解説はとても躍動的かつ明確で、政府の省エネと排出削減促進における役割について、PRによる位置づけと政策による支持という新たな考えが生まれた。
- ・日本は環境保護や気候変動・環境について重視していて、それが暮らしのすみずみに体现され、政府も個人も本当の意味で低炭素の環境保護を実践している。また、日本の法律の方がより整備が進んでいる。
- ・参加青年の質問にとっても専門的かつ丁寧に答えてくれた。

(4) 東京都プログラム（こども家庭庁訪問）について



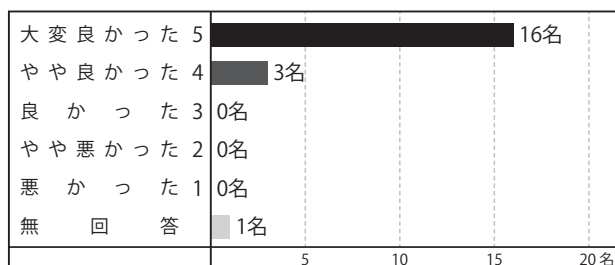
- ・少子高齢化という世界的な問題についての日本の解決策を深く理解できた。
- ・以前ニュースで聞いただけのこども家庭庁を実際に訪れることができ、とても光栄だったし、日本の少子化対策について大いに学べた。
- ・政府職員からの紹介と回答に感謝する。子どもは祖国の花・祖国の未来であり、少子高齢化は中日両国に共通する問題でもあり、示唆に富むものだった。
- ・日本が今行っている出産を支援する政策はとても良い。
- ・例を挙げながら躍動的に説明していた。とても良かった。私たちのディスカッションや成果発表にとっても参考になった。

(5) 東京都プログラム（青年の意見交流会）について



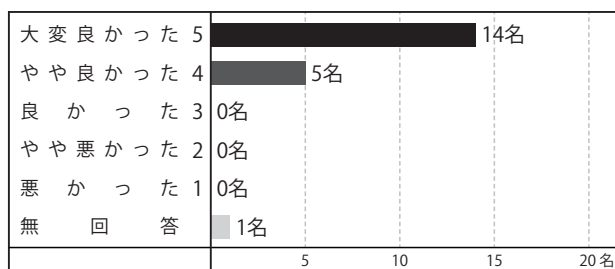
- ・日本の皆さんは喜んで彼らの考え方を共有し、しっかり準備していて、楽しい交流となった。
- ・両国の違いをたくさん知って、とても良い体験になった。
- ・一人一人がしっかり準備しており、コミュニケーションがスムーズで勉強になった。
- ・面白かった。通訳者に感謝する。

(6) 東京都プログラム(東京観光)について



- ・チームに分かれて、彼らの好きな東京グルメを食べたり、東京タワーや六本木のイルミネーションを見たりして、幻想的な体験をした。
- ・日本側の青年の段取りに感謝、とても楽しかった！一生忘れない思い出。
- ・自分では見つけにくい場所に連れて行ってくれた。

(7) 茨城県プログラムについて



- ・つくば市のスーパーサイエンスシティ構想は、テクノロジーによる社会貢献を出発点としていて、大きな成果を上げている。
- ・良かった。中国が大好きという筑波大学の学生と知り合うことができた。茨城の町を見下ろし、たくさんの文化や特産物を知ることができた。
- ・茨城に入っすぐ、スタッフの熱意を感じ、紹介内容もとても勉強になった。

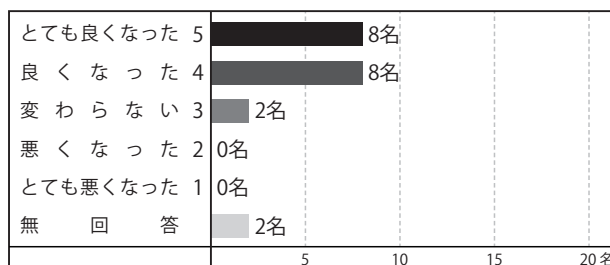
- ・温かいもてなしとしっかりした準備で、知事もお忙しい中会いに来てくださり、本当に感謝している。
- ・県知事の発言内容はとても実質的で、県民の暮らしを改善していこうという政治的熱意が感じられ、感動した。

(8) 日本滞在中に最も印象的だったことはなんですか。

- ・日本では人と接する時、とても秩序正しく几帳面。
- ・日本の皆さんは心を込めて全てを段取りし、食事、パフォーマンス、交流など、全てにおいて、行き届いていた。
- ・印象的だったのは、互いのパフォーマンス。パフォーマンスを通じて、相手に特有の文化や情熱を感じることができた。例えば日本のダンスや歌、筑波大学の日本伝統楽器の紹介、中国青年たちのパフォーマンスなどがとても記憶に残った。パフォーマンスの背後に、双方の文化の多元性や中日友好の紐帯が体现されている。
- ・日本青年、スタッフの細やかさ、緻密さ。
- ・日本青年は心を込めてエクスカージョンなどの計画・準備をしてくれた。

3. 事業を終了して

(1) この事業に参加して日本に対する印象は変わりましたか。



- ・実際に日本人の行動様式を見て多くのことを感じた。
- ・変わった、日本の皆さんは問題処理にとってもまじめに取り組み、とても頼りがいのあるパートナー。
- ・日本に来るのは初めてで、これまでの日本へのイメージが現実のものになった。例えば、日本はとてもクリーンで、日本人は礼儀正しく、細やか、何でも事前に準備をする。これらを通じて、日本人ともっと交流したい、日本のことをもっと深く知りたいと思った。とにかく、日本には一見の価値があると思う。
- ・中日青年親善交流を経て、自身のこれまでの日本に対する印象と実際の状況が少し違っていることに気づいた。日本の青年との交流を経て、日本への考え方に大きな変化が生まれた。
- ・これまでの認識が一新された。また来たい。

(2) 今後、この事業の経験をどのようにいかしていきたいですか。

- ・日本側の組織・段取りに関するノウハウを学び、中国側の取り組みを改善する。
- ・今回の学習活動での経験や知識を深く研究する。中国の若者がこの活動に参加するよう積極的にリードする。日本青年の友達と連絡を取り合い続ける。
- ・学校やコミュニティで日本について学んだことを共有できる。親善事業で学んだ日本についての客観的事実を話すことで、より多くの人の日本への見方を変えさせ、異なる文化背景における価値観の違いを理解してもらうことで、中日民間友好往来を促進する。
- ・今後の中国団に意見や参考点を伝える、家族や友人と見聞を分かち合う。
- ・自身の専攻に関する成果物を生成する際、日本の事例の描写を加える。

(3) その他、この事業を通じて特に意見・提言があれば記入してください。

- ・日本の暮らしを体験できる行程が増えれば嬉しい。
- ・もっと時間を延ばして、そんなに詰めるようにならないほうが良い。
- ・高齢者施設や機関を訪問しても良い。
- ・1～2日くらい延ばせば、もっと余裕あるスケジュールを組むことができる。
- ・両国の青年同士、事前の準備段階で意思疎通できれば、情報を同期させることができる。

事業の総括評価

2024年度日本・中国青年親善交流事業

I 趣旨

本年度事業の成果を測り、次年度以降の事業に活かすため、日本青年、及び中国青年を対象として事業終了時にアンケートによる評価を行った。アンケートにおける評価の数値基準は、5段階評価(評価の高い方から5～1)を

基本とした。

※代表青年に対して行った5段階評価のアンケートの詳細については「資料編」参照。

II 評価結果

1. 事業目的の達成度(日本青年)

①日本と交流相手国の相互理解の促進 [1-(7)]

「この事業を通じて、あなたと相手国の人々との相互理解が深まったと思いますか」との問いに対して、日本青年のうち5段階評価の4(深まったと思う)以上と回答した者は86.7%であり、全体の9割近くが相互理解が深まったと評価した。

②日本と交流相手国の友好の促進 [1-(8)]

「この事業を通じて、あなたと相手国の人々との友好が深まったと思いますか」との問いに対して、日本青年の全員が5段階評価の4(深まったと思う)以上と回答しており、極めて高い評価となった。両国青年の友好促進に資する事業になったと考えられる。

③東京フォーラムへの満足度 [2-(1)]

東京フォーラムについて、日本青年の93.3%が5段階評価の4(良かった)以上と回答し、高い評価であった。続く自由記述欄では、「ディスカッションで、両国と比較して共通点・相違点を踏まえて今後の協力体制について話し合うことができた」「中国に対して理解を深めるのとともに、私自身も日本について深く知ることが出来た」といったコメントが寄せられた。

④社会貢献活動への意欲 [1-(9)]

「事業参加を通じて、社会貢献活動を始めたい、参加したいという意欲等を持ちましたか」との問いに対して、5段階評価の4(ある程度意欲を持った)以上と回答した者は93.3%であり、高い評価であった。「今回の事業を通じて、知らない世界を知ること、多くの人と関わりながら問題解決をしようとする楽しさを学べた」というコメントも寄せられた。

⑤事業参加による参加青年の将来への影響 [1-(10)-1]

「この事業は、あなたの将来に役立つと思いますか」との問いに対して、日本青年の全員が5段階評価の4(役立つと思う)以上と回答し、極めて高い評価であった。本事業は日本青年において、自身のより良い将来を開くという観点で有意義だったと受け止められたと言えよう。

【参考】事業目的の達成度(中国青年)

①日本と交流相手国の相互理解の促進 [1-(6)]

「この事業を通じて、あなたと日本の人々との相互理解が深まったと思いますか」との問いに対して、中国青年の全員が5段階評価の4(どちらかといえば思う)以上と回答し、極めて高い評価となった。

②日本と中国の友好の促進 [1-(7)]

「この事業を通じて、あなたと日本の人々との友好が深まったと思いますか」との問いに対して、中国青年の全員が5段階評価の4(どちらかといえば思う)以上と回答しており、極めて高い評価となった。

両設問の記述回答では「実際に日本の皆さんと交流することで、多くの固定概念が改善した」「今回知り合った日本人の友人と一生の友達になりたい」というコメントが寄せられ、本事業が両国青年の相互理解と友好関係の促進に大きく貢献したと考えられる。

③東京フォーラムへの満足度 [2-(1)]

東京フォーラムについて、中国代表青年の全員が5段階評価の4(やや良かった)以上と回答し、極めて高い評価であった。続く自由記述欄では「日本側のスケジュール手配に感謝する。各活動を通じて、各方面から日本を紹介し、私の日本に対する理解を深めることができた」といったコメントが寄せられた。

④事業参加による参加青年の将来への影響 [1-(8)]

「この事業は、あなたの将来に役立つと思いますか」との問いに対して、中国青年の全員が5段階評価の4(役立つと思う)以上と回答し、極めて高い評価であった。「私の視野を広げ、将来の人生に大きな影響を与えてくれた。将来のキャリア選択などにもプラスに働くと思う」といったコメントが寄せられた。本事業は中国代表青年において、日本に対するより良い印象を与え、日本青年との友好関係構築という観点で有意義だったと言える。

Ⅲ 総括評価

最後に、アンケートの総合評価を含めて、今回の総括評価をまとめる。

「事業全体をどのように総合評価しますか [1-(2)]」との問いに対して、日本青年の全員が5段階評価の4(良かった)以上と回答し、極めて高い評価となった。

続く自由記述欄では、事前研修から続く一連のプログラムを通じて、準備段階では日本団の絆を深めるとともに自分自身の中国への理解に繋がり、帰国後は中国の地で感じたことを団員間で共有し、青年主体で準備、本番、振り返りができたことが良かったといった声、両国青年が日中代表ユースフォーラム全10日間の日程を共に過ごすことにより、中国青年と想像以上に交流し仲良くなることができた、お互いに自由に会話する中で本当の中国に触れられたように感じたといった声、中国青年と友情を築く中で中国青年のうちの数名の日本観をガラリと変えることができたといった声、ディスカッションでは互いに自国を見つめ直し相手国を認める機会となったといった声、政府主催の事業でないとなかなか訪問できない機関への訪問や、講義などの機会が貴重で有意義だったといった声、この事業での経験を通じて、これからも自分は海外に飛び出してあらゆることにチャレンジしても大丈夫だという自信がついたといった声、等々、事業参加を通じて多くの学びを得たこと

が伺える前向きなコメントが多数寄せられた。

事業を終了しての今後の展望として、「今後、この事業の経験をどのようにいかしていきたいですか。[5-(1)]」との問いに対して、日本代表青年からは、事後活動に積極的に参加し、中国について興味・関心を持つ仲間を増やしていきたい。今回の事業を通じて得た中国に対する自分の印象を多くの人に伝え、自分の目で実際に見て知ろうとすることの重要性を伝えていきたいといった声、世界中を飛び回る上で、観光や仕事だけではなく友人を作ることがいかに価値のあることかを学んだ。今後は国の隔てにとらわれずに自分から交流を仕掛け、友人を増やしていきたいといった声、いずれは中国と関わる企業で働き、社会人として日中友好のために貢献していきたいといった声、今回出会った18人の青年との交流を絶やさず、相互理解に繋げていきたい、中国青年にして頂いた恩を忘れずに、自分自身の活動の中で還元していきたいといった声など、事業に参加した経験を糧として、将来に向けて自らの主体的な活動を展望するような前向きなコメントがこちらも非常に多く寄せられた。

以上、日本青年による評価結果を総括すると、全体として、日本青年は、事業への参加を通じて日本及び中国、そ

して国際社会への理解を深めるとともに、日中友好に貢献する人材としての素養を十分に高めたと言える。さらに、将来は、事業で得られた学びを糧として、それぞれのフィールドの中で、リーダー的存在として指導性を発揮しつつ活躍

していくことが多いに期待できることから、両国青年の努力と両国の全ての関係者の尽力の甲斐あって、本事業の目的は達成され、大成功を収めたと評価できる。

日本・中国青年親善交流事業

発行：内閣府

〒100-8914

東京都千代田区永田町1-6-1

TEL：03-6257-1435

URL：<https://www.cao.go.jp/koryu/>

編集：一般財団法人 青少年国際交流推進センター

〒103-0013

東京都中央区日本橋人形町2-35-14

東京海苔会館 6 階

TEL：03-3249-0767

URL：<https://www.centerye.org/>

印刷：株式会社 長正社

